

湊川隧道の保存について

湊川隧道は、湊川の付替えによって明治34年（1901）に築造された日本で初めての近代河川トンネルであり、当時としては世界で最大規模の大きさです。阪神・淡路大震災で被災した新湊川の河川改修工事に伴って新湊川トンネルが完成し、平成12年（2000）に河川トンネルとしての役目を終えましたが、河川を付替えるという当時の地域社会情勢と歴史的経緯、トンネル施工技术、土木構造物として優れた意匠などが評価され、保存することになりました。

現在、平成13年7月に発足した「湊川隧道保存友の会」によって、一般公開が行われ、あわせてミニコンサートが開催されるなど、近代土木遺産である湊川隧道は市民の参画と協働の場であり、'地域の宝'になりつつあります。

このたび、湊川隧道を見学される方々にわかりやすい説明用のパネルを制作するにあたり、「湊川隧道保存友の会」に編集を依頼するとともに、田辺真人先生（園田学園女子大学名誉教授）に記述内容等についてのご指導をいただきました。

湊川隧道が、地域の歴史や社会基盤整備を担った先人の土木技術を学ぶ場として、さらには市民交流の場として多くの方々に活用していただくことを願っています。

平成22年3月 兵庫県神戸県民局神戸土木事務所

トンネル保存検討委員会について

平成 12 年 2 月に「会下山トンネル保存検討委員会」が設置され、5 回の委員会を経て、平成 12 年 11 月に湊川隧道（会下山トンネル）の歴史的価値評価等についての提言が出されました。

【委員会の構成】

委員長	西 田 一 彦	関西大学工学部教授	地盤工学
委 員	神 吉 和 夫	神戸大学工学部助手	土木史、都市水利学
	桑 田 優	神戸国際大学経済学部教授	日本近世社会経済史
	田 辺 眞 人	園田学園女子大学国際文化学部教授	地域史、比較文化論
	馬 場 俊 介	岡山大学環境理工学部教授	土木史論
	久 武 勝 保	近畿大学工学部教授	トンネル工学
	本 地 真 穂	月刊センター編集長	文化論
	芦 田 勝	神戸市兵庫区長	行政
	亀 山 勤	兵庫県県土整備部土木局河川課長	行政

【提言内容の概要】

技術的評価（土木技術の時代を画するような知恵や革新性、完成度や規模の大きさなどについて評価したもの）

湊川隧道は、わが国初の河川トンネルとして明治 34 年 2 月に竣工した。延長が 604m（竣工当時）、断面形状は幅約 7.3m、高さ約 7.6m であり、当時としては非常に大きい規模である。煉瓦覆工に豎積みと呼ばれる技法を用い、覆工背面には裏込めが密に施されている。未固結地山である地質状況に対応した構造的工夫が伺われ、トンネルの安定性に大きく寄与しているものと考えられる。河川トンネルという条件を踏まえて、インバート部は煉瓦の上に切石（御影石）を敷き詰めており、洗掘・摩耗等への対策が十分になされている。ツルハシやノミ等を用いた手掘りで作業され、湧水対策を含め、未固結地山に対応した非常に丁寧な施工が行われている。当トンネルの工事にあたっては、沖野忠雄、滝川釦二などが係っており、最高レベルの技術が集積されたものと思われる。

意匠的評価（外見の美しさ、力学的美しさ、周辺の自然景観との融合性などについて評価したもの）

坑門のデザインは、上流側は古典様式、下流側はゴシック様式である。下流側坑門のデザインは、当時の意匠デザインを代表する琵琶湖疏水の第二トンネル西口や第三トンネル東口に匹敵する完成度の高さを有している。上流側坑門は、昭和 2 年の神戸電鉄（旧神戸有馬電気鉄道株式会社）工事に伴うトンネル延伸工事の際に約 66m東に移設され、デザインが変わったという歴史を持つ。扁額は、小松宮彰仁親王の揮毫によるもので、下流側が『天長地久』、上流側が『湊川』となっている。このうち『天長地久』は「老子」に見られ、また、「長恨歌」の名前の由来とされる言葉である。書体は漢隸書であり、漢曹全碑を手本とした筆跡となっている。

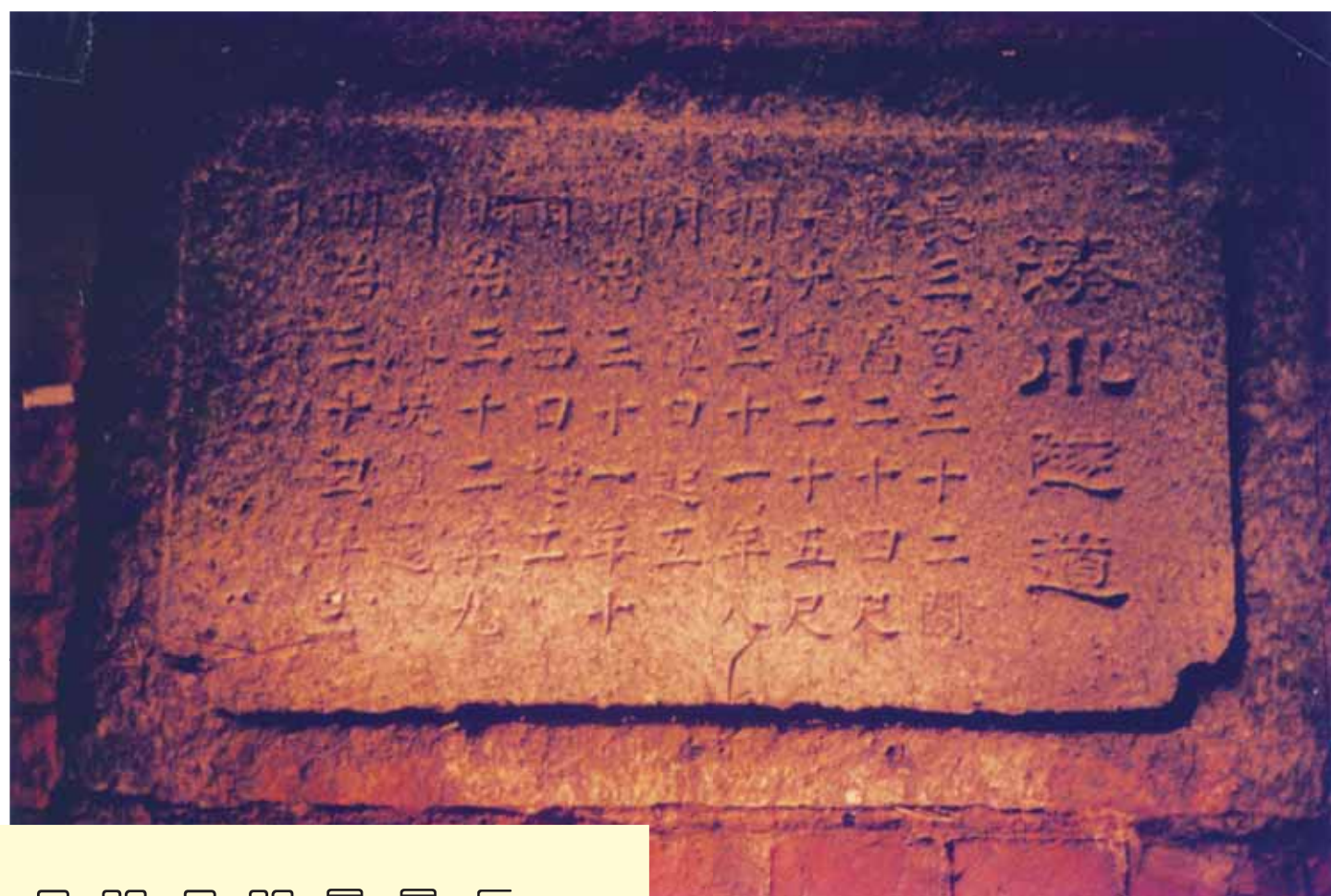
系譜的評価（地域特性、歴史的な事件・人物等との係わり、地元での愛着があるかどうかについて評価したもの）

湊川隧道を含む湊川の付替え事業は、上水道工事（奥平野浄水場他）、港湾修築（兵庫運河開削）とならぶ神戸市三大事業の一つとされている。湊川の付替えは、兵庫と神戸の間の交通上・経済上の障害を取り除くという地域政策としての側面を持つとともに、改修計画の世論が高まっていた神戸港への土砂流出対策としての目的も有していた。また、湊川は、度重なる水害が発生しており、当時の治水対策を象徴する事業でもある。河川付替え後、埋め立てられた土地は後に湊川新開地として発展する。これら工事は、小曽根喜一郎、大倉喜八郎、藤田伝三郎ほか多くの地主や事業家が加わった画期的な民間事業であった。これまで幾度か繰り返されてきた湊川の付け換え、流路の変遷は、平清盛の時代から語られるものであり、新湊川の付替えも、兵庫の大きな歴史の流れの中で明確に位置付けられる事業である。

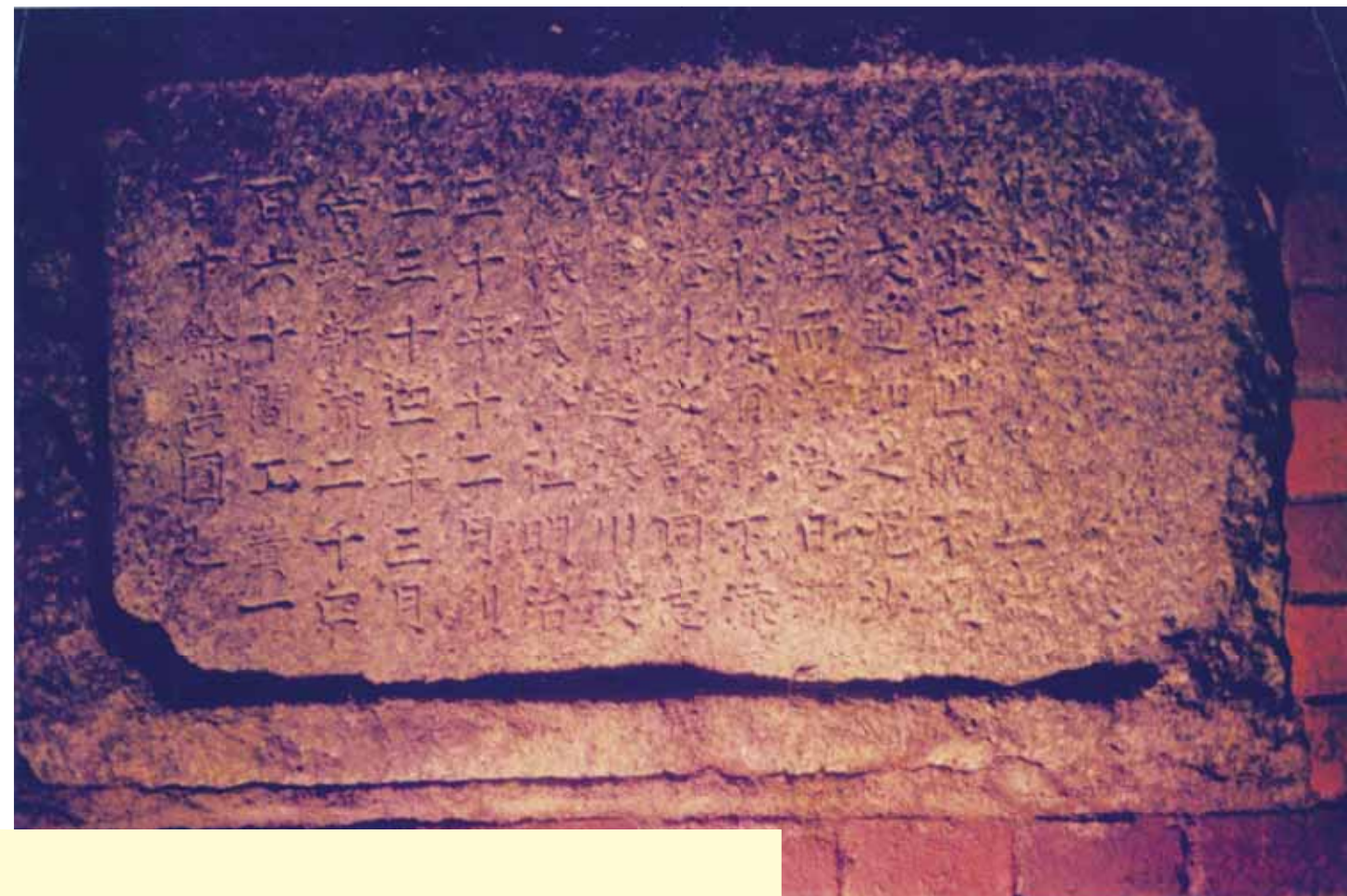
湊川隧道について

‘湊川隧道’という名称

湊川隧道は‘会下山隧道’とも‘会下山トンネル’とも呼ばれていましたが、阪神淡路大震災で被災したトンネルの復旧工事を進める中で、トンネルの中ほどに「湊川隧道」と記した銘板（現在は、補強コンクリートの中に埋まっております。）が確認されたことから‘湊川隧道’という名称にしています。



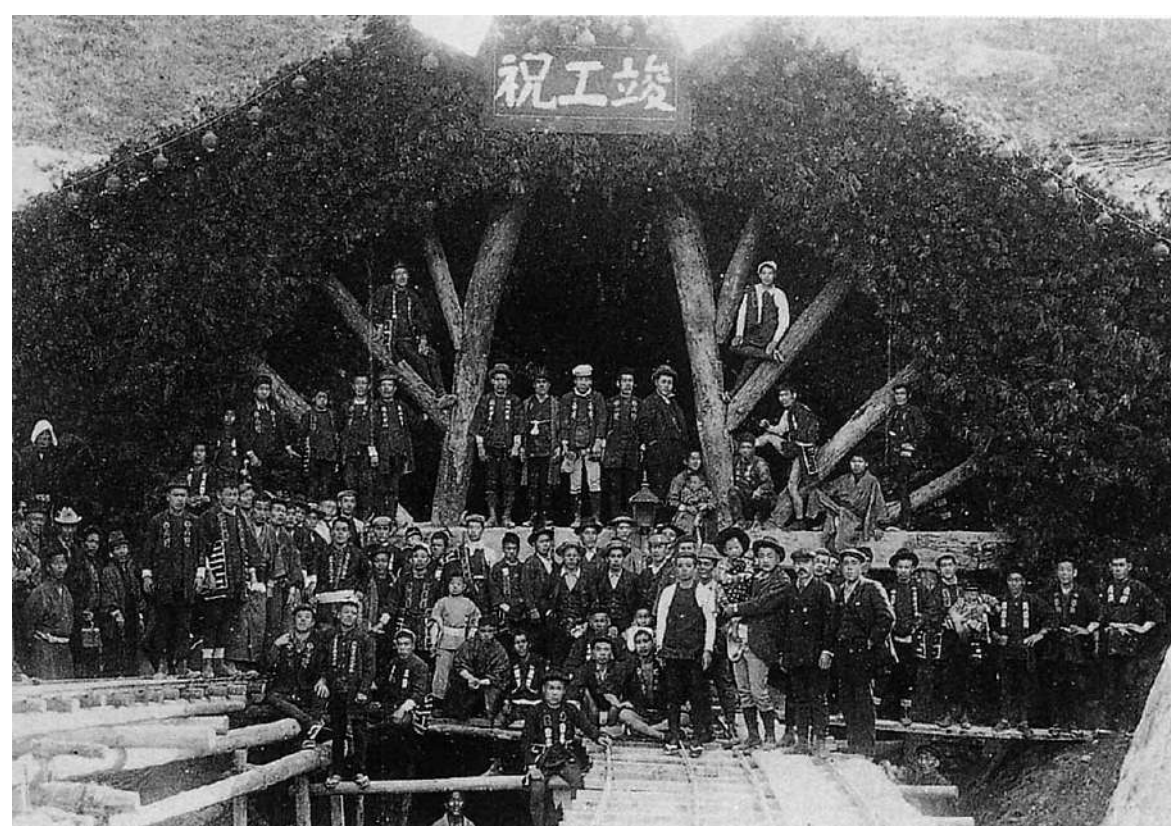
湊川隧道
長三百三十二間
最大幅二十四尺
最大高二十五尺
明治三十一年八月
東口起工
明治三十一年十月
西口起工
明治三十二年九月
導坑貫通
明治三十四年二月
竣工



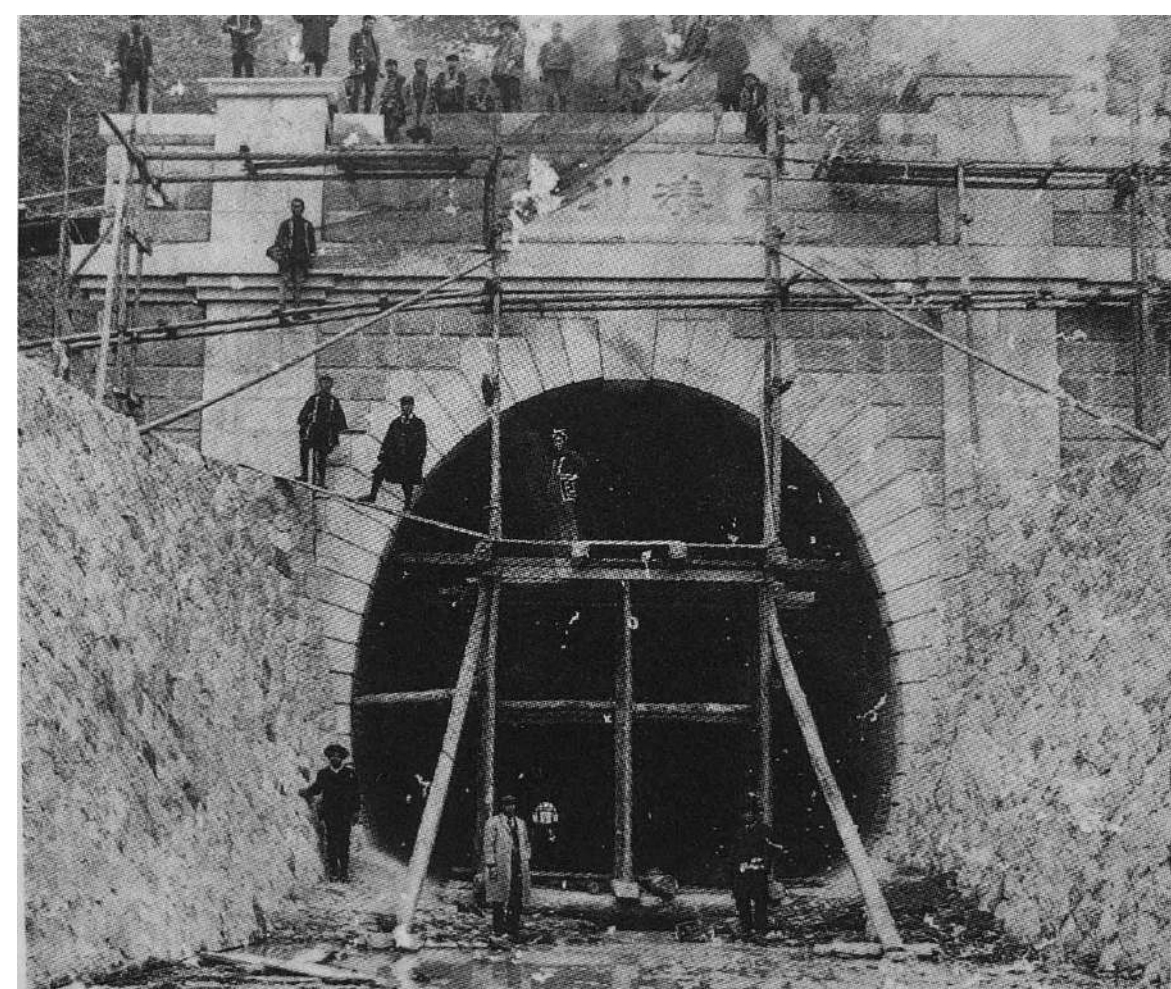
〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇
於東西〇未不〇
於交通如之泥沙
流注而海港日漸
填於是〇下流
於港外之讓同志
者胥謀起湊川改
修株式会社明治
三十年十二月創
工三十四年三月
營竣新流二千四
百六十間工費一
百十餘萬圓也



工事中の下流側坑門（『神戸のあゆみ 市制70周年』）



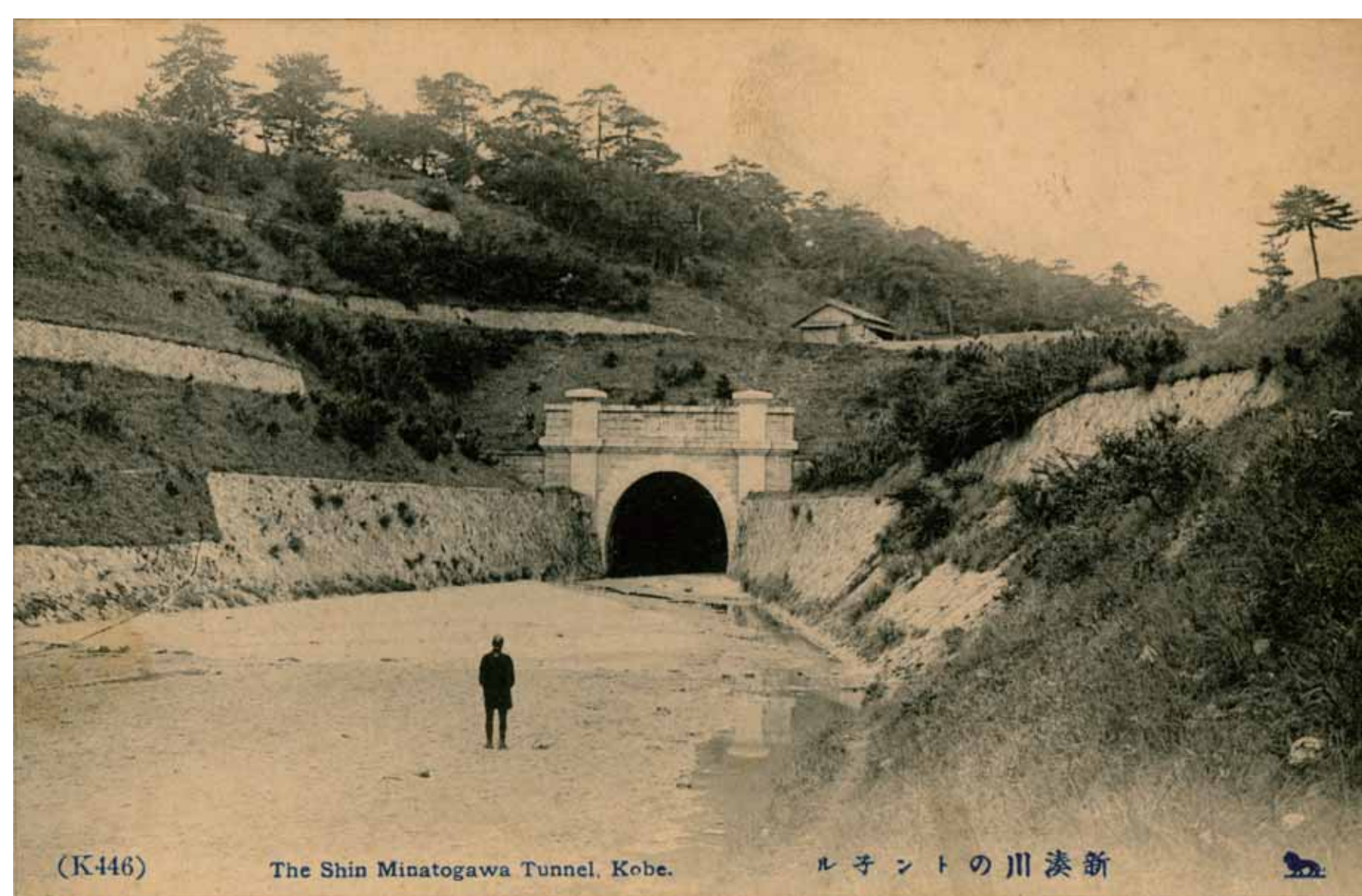
出典には明治33年6月竣工とあります。坑門を除いた工事の竣工を記念した写真と思われます。（『大成建設土木史』）



竣工した上流側坑門（『こうべ 神戸市制100周年』）



築造直後の下流側坑門（絵葉書：神戸新聞総合出版センター提供）



築造直後の上流側坑門（絵葉書：ハケ代信行氏提供）



築造間もない頃の下流側坑門周辺の様子（『ふるさとの思い出写真集』）



この上流側坑門は、昭和3年に神戸電鉄の建設で再構築されたものです。（撮影：平成7年）

扁額について

トンネルの坑門に掲げられている額は扁額とも題額とも呼ばれています。この連絡通路に展示されている額縁は、湊川隧道の坑門に掲げられていた扁額の拓本です。新湊川トンネル工事のため一時的に扁額の石材が取り外されていたので、落款の文字を判読するために拓本をとることができました。文字は、小松宮彰仁親王による揮毫で、上流側は「湊川」、下流側は「天長地久」です。「天長地久」は、「老子」を出典とし、天地が永久に変わらず物事が永遠に続くことを意味しています。小松宮彰仁親王は、伏見宮邦家親王の第八王子で、明治維新後、東伏見宮と称しさらに小松宮と改称し、軍事総裁、陸軍大将、元帥などを務めました。書体は、一東書会井茂圭洞先生によれば漢の曹全碑にならっているとのこと。

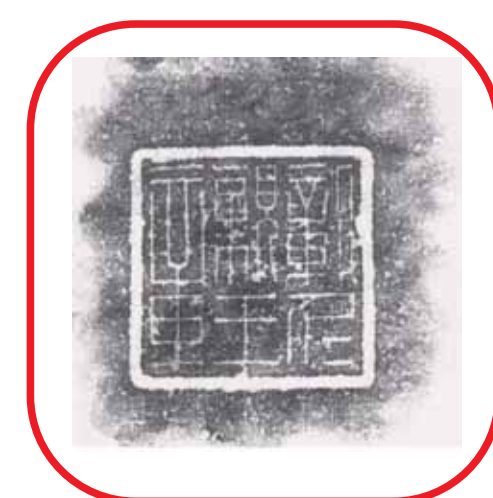


昭和三年三月誌
上ノ扁額八本
疏水隧道ヲ六
十六米突延長
築造二際シ舊
隧道口ニ有リ
シヲ此處ニ移
設セルモノナリ

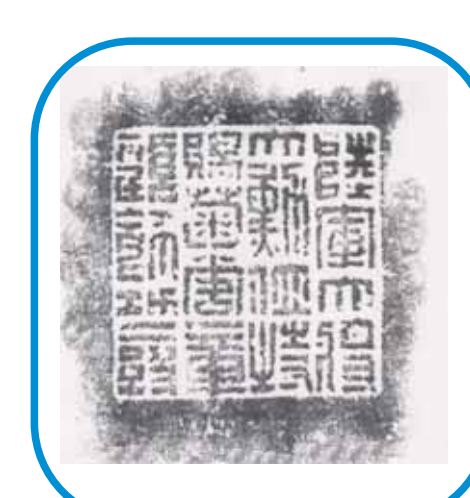
扁額之記



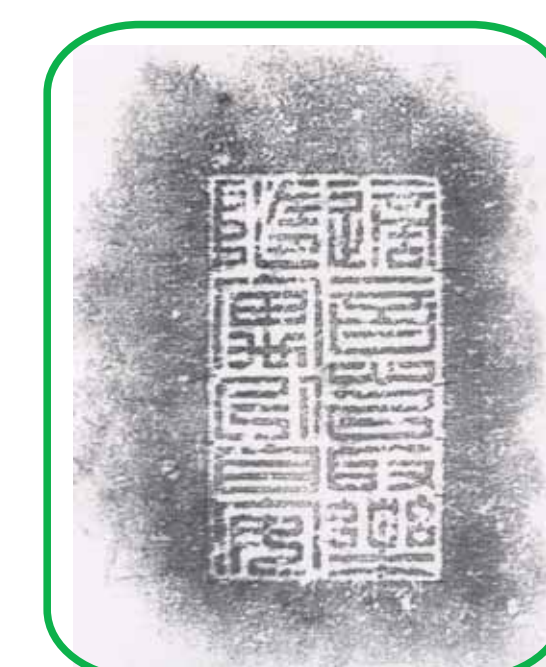
彰仁親王
章



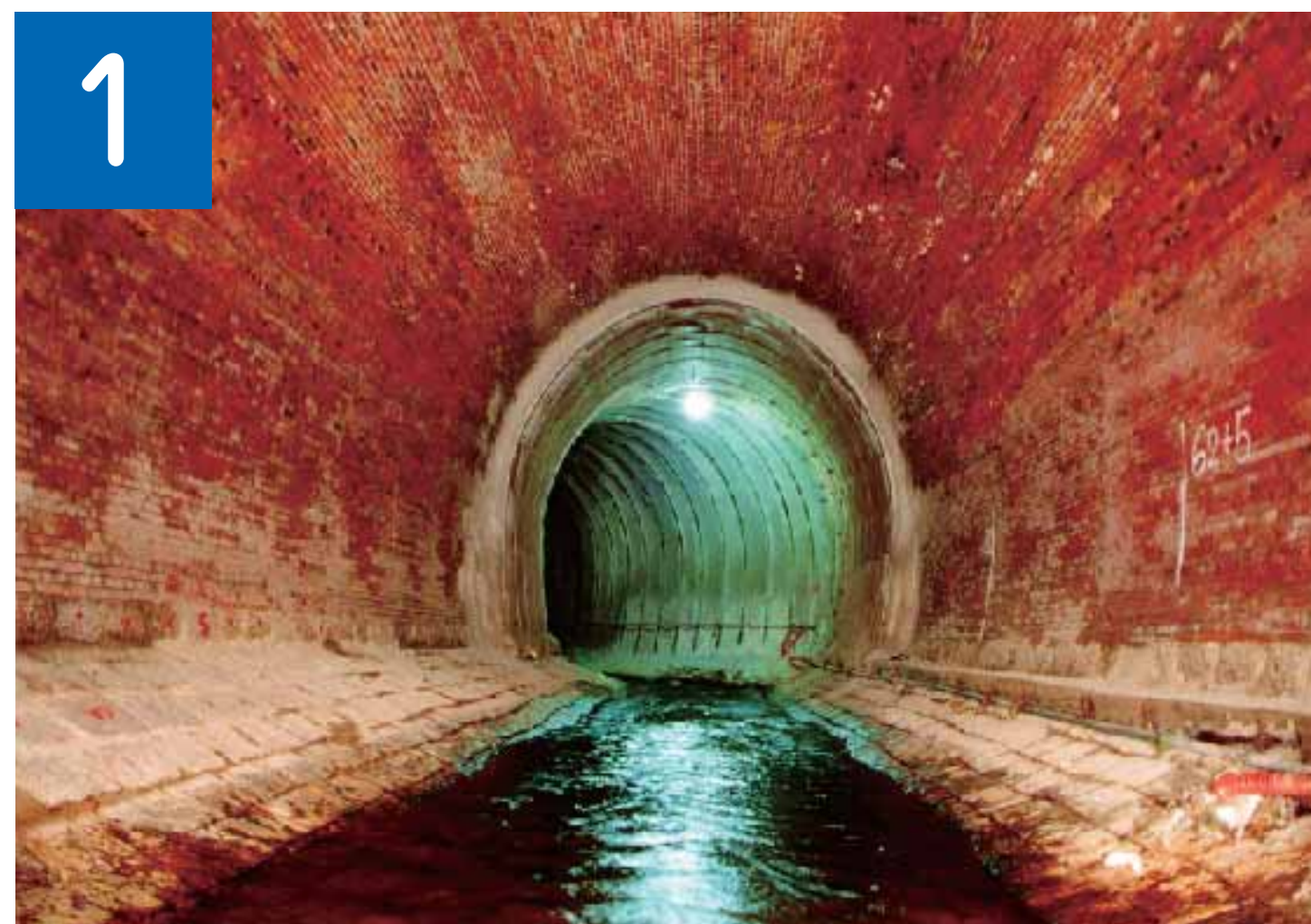
陸軍大将
大勲位特
賜菊華章
頸飾功一級



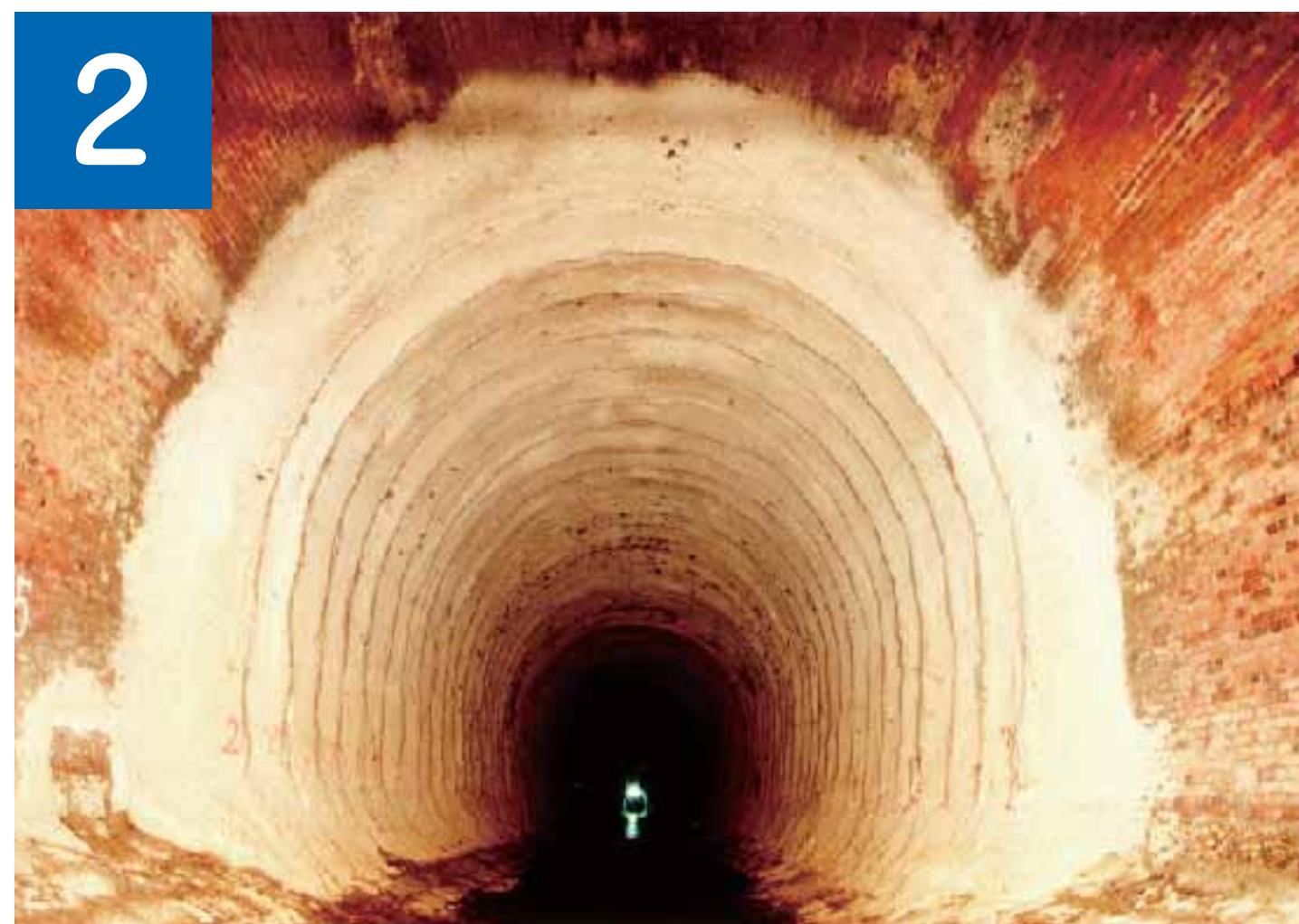
適意以取樂
隨寓以自安



湊川隧道(会下山トンネル)



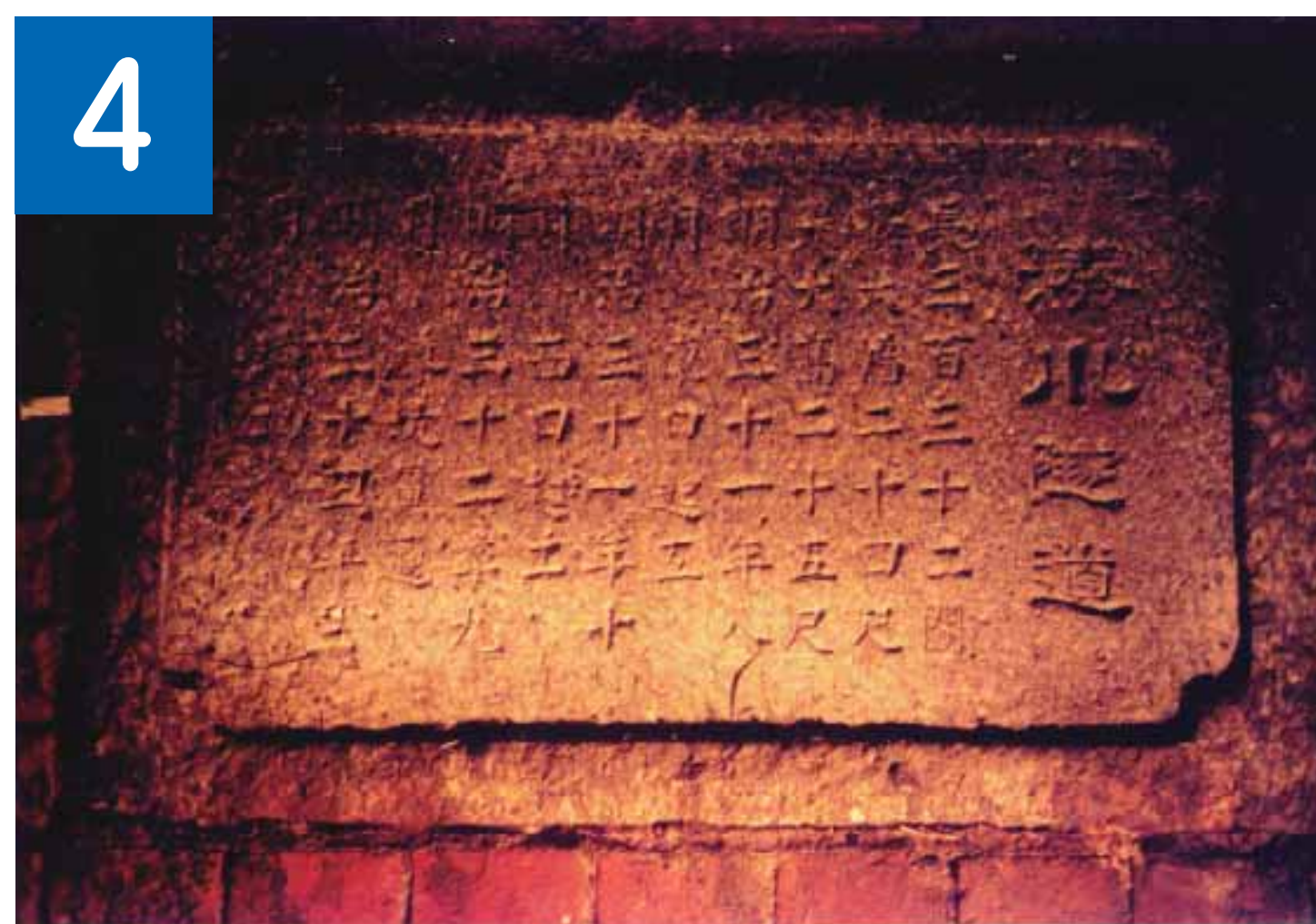
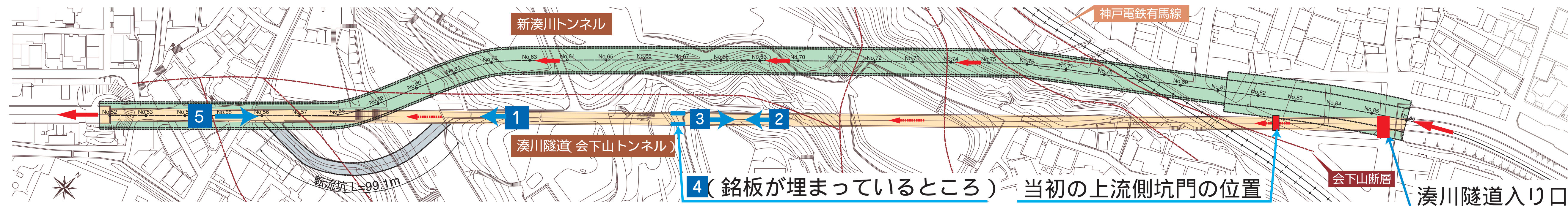
トンネル内の下流付近の写真です。向こう側に見えるのは、新しいトンネルの工事中に水の流れを迂回させていた転流坑です。



写真の白くなっている部分は、震災後の調査で沈下・変形などが見られたため、モルタルを吹き付けるなどの補強工事が行われた部分です。



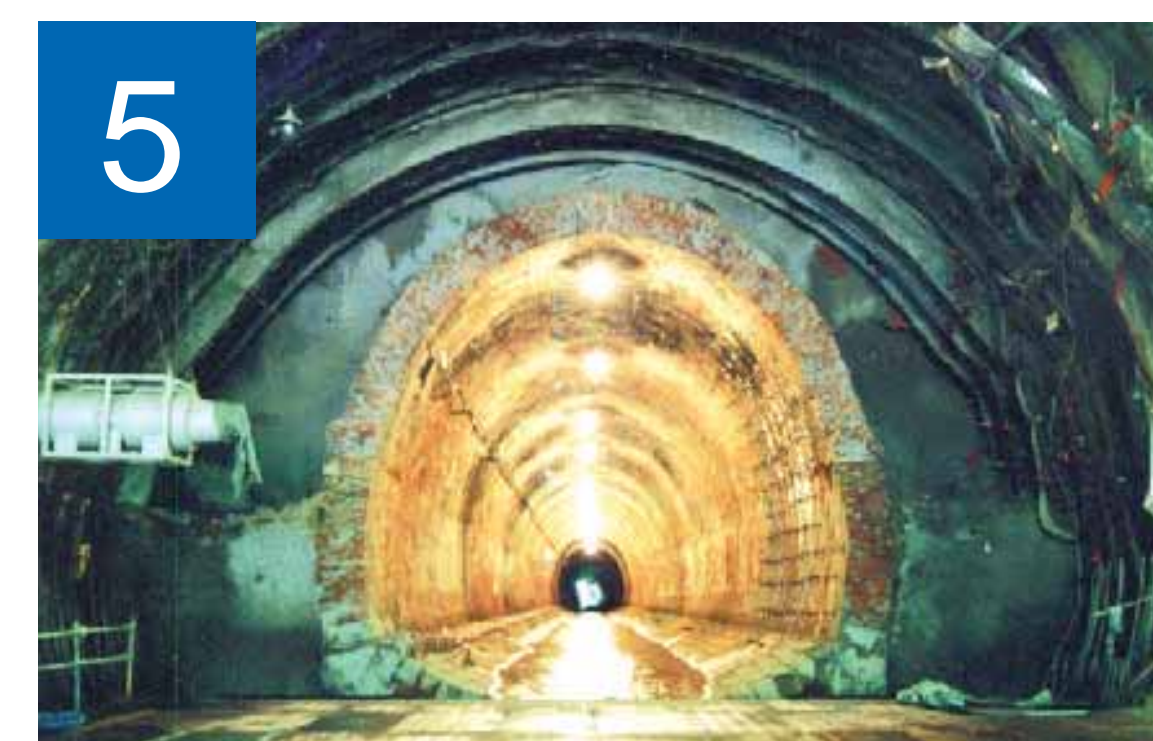
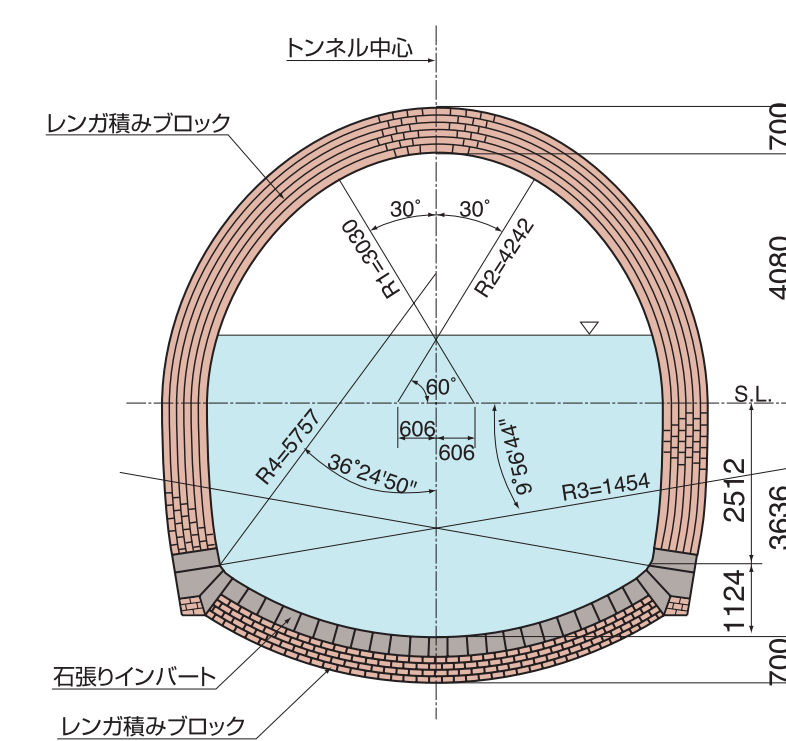
震災による被害を受けなかったところは、レンガに覆われた築造当時の状況が残っています。



この写真は、湊川隧道の上流側の入口から350m付近に埋め込まれていた銘板で、“湊川隧道”の名のほか、トンネルの諸元や工期などが記載されています。しかし、現在は震災後のモルタルを吹き付けた補強工事によって見ることはできません。

湊川隧道 (会下山トンネル) 概要

竣 工	明治34年8月 (昭和3年3月増築)
構 造	アーチ部・側壁部:レンガ積み インバート部:切石積み 増築部は鉄筋コンクリート造
延 長	L=604m (増築後670m)
断面規模	内 空 幅 B≒7.3m 内 空 高 H≒7.6m 内空断面積 A≒45m ²



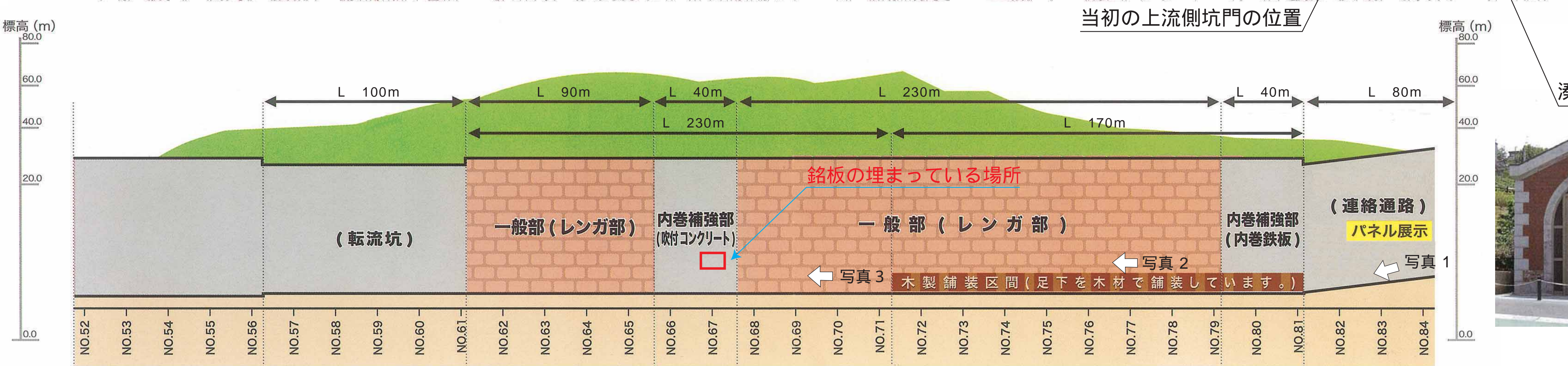
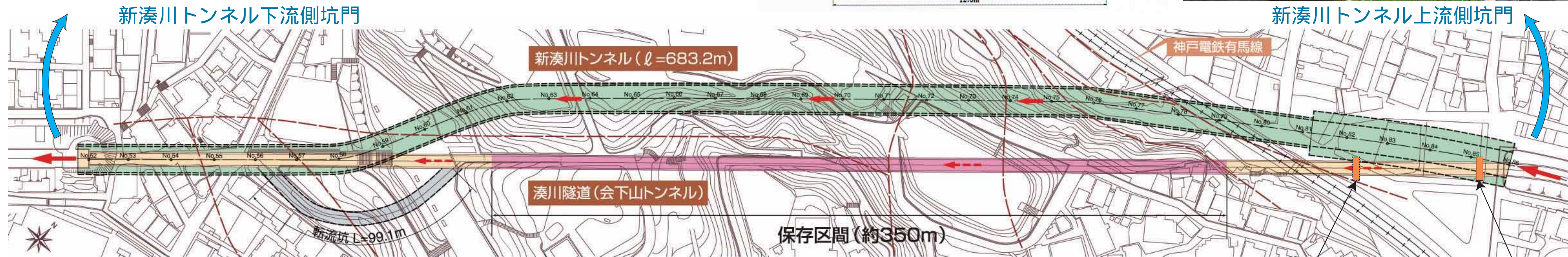
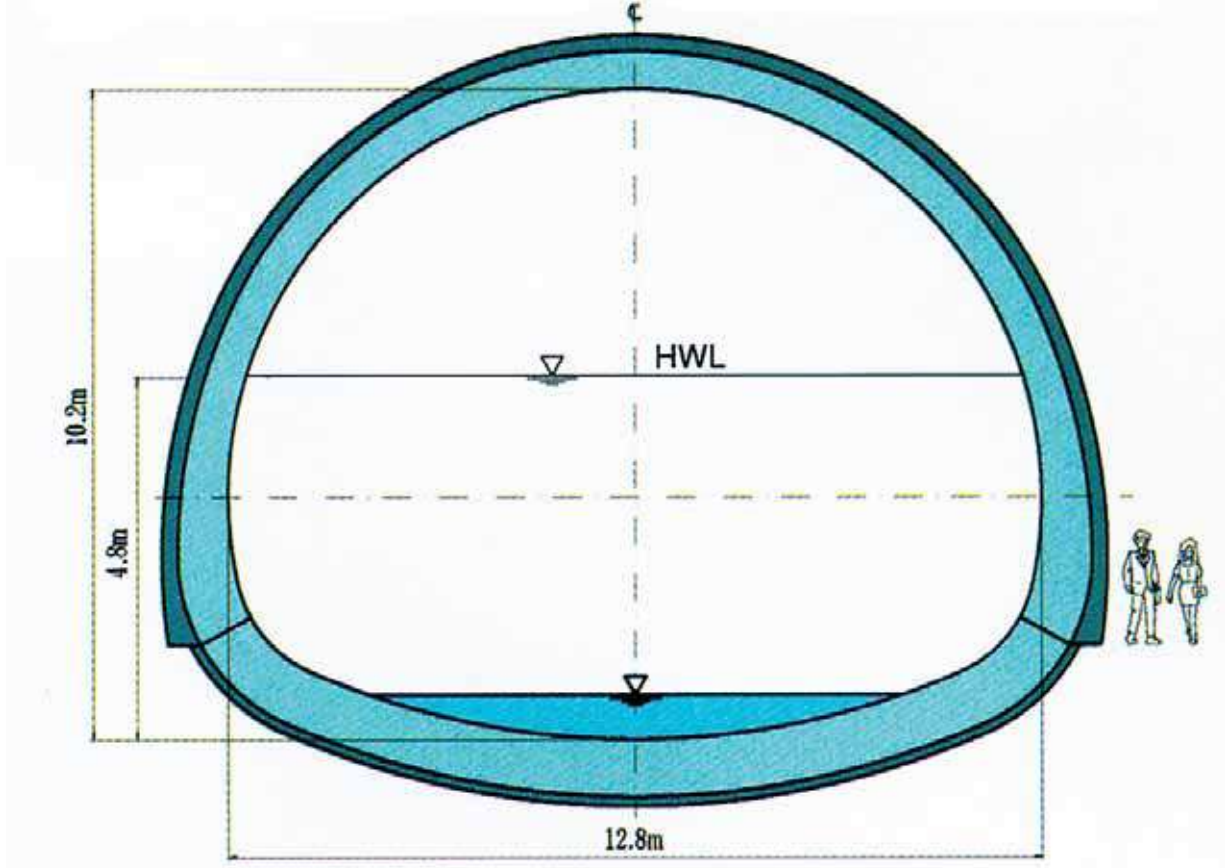
《人力で掘られた湊川隧道》

湊川隧道は、明治34年に竣工した全長約600mのトンネルで、日本で初めての近代河川トンネルです。掘削当時の明治時代には現在のような土木技術もなく、全て人力による手掘りで工事が行われました。このことから、湊川隧道の工事がいかに難工事であったかを伺い知ることができます。

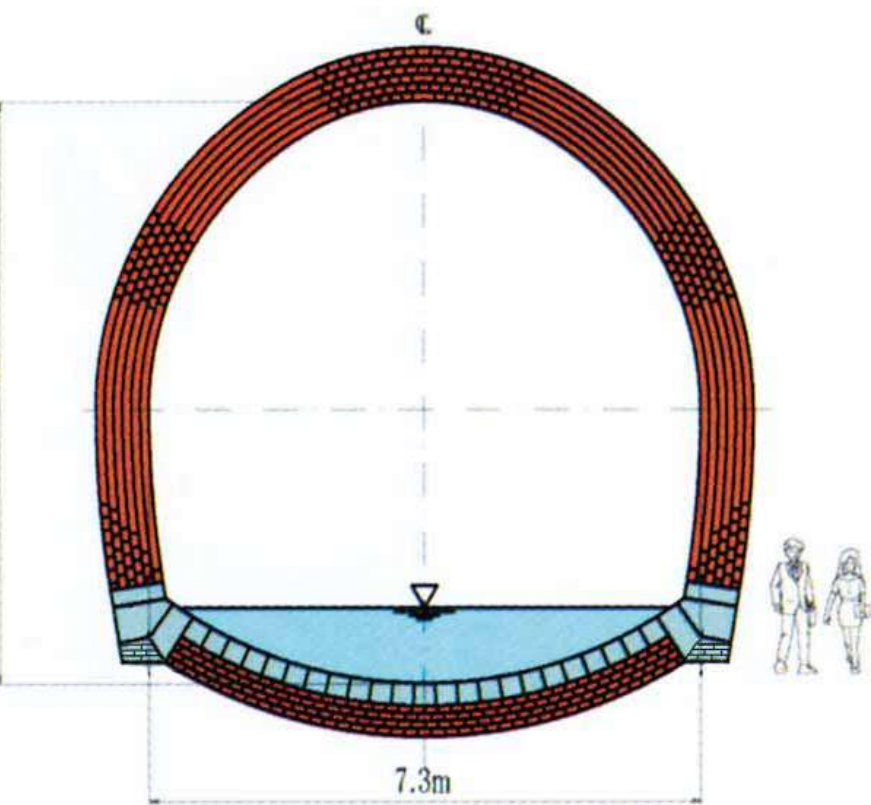
湊川隧道（会下山トンネル）と新湊川トンネル



延 長	683.2m	既設拡大区間 97.2m バイパス区間 491.0m 開 削 区 間 95.0m
掘削断面積	約 144 m ²	
内空断面積	約 105 m ²	
計 画 流 量	260 m ³ / sec	
縦 断 勾 配	1 / 303	
最小曲線半径	150m	



竣 工	明治34年 8月（昭和3年3月増築）
構 造	アーチ部・側壁部：レンガ積み インパート部：切石積み 増築部は鉄筋コンクリート造
延 長	L = 604m（増築後670m）
断面規模	内 空 幅 B 7.3m 内 空 高 H 7.6m 内空断面積 A 45 m ²



湊川隧道内部（写真3）

湊川隧道内部（写真2）

連絡通路（写真1）

湊川隧道に使用されているレンガと石材

石材について

インバート部に敷き詰められた石材は、常時は水の流れて、洪水時は土砂の流れにさらされて洗掘磨耗に耐えるという目的を持っています。インバート部は、石畳が凹状に湾曲したように切石が敷き詰められています。横断方向に25列あり、両端部の3個の石材は、19個の切石を両側が挟みこむように配置されて側壁部の煉瓦積みの基礎石の役目を担っています。その配置は、下図のとおりで、A、B、Cの3タイプがあり、それぞれの重量は、Aタイプ＝約270kg Bタイプ＝約340kg Cタイプ＝約100kg
なお、石材は、岩質や当時の石材産地の状況などから岡山県の北木島をはじめ瀬戸内海の複数の産地から運ばれたと推定されています。



▲ 新湊川トンネル工事中の湊川隧道

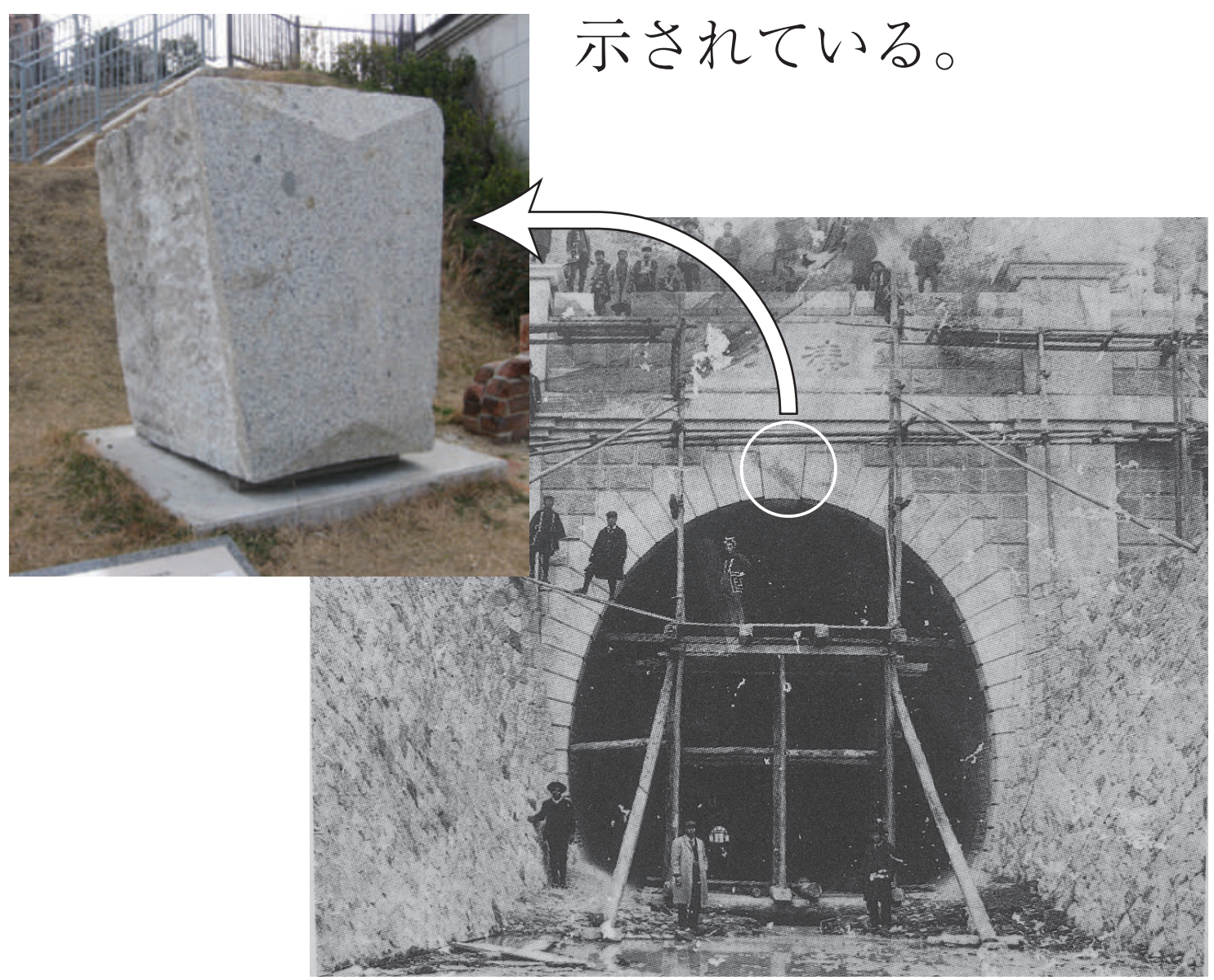
レンガについて

隧道内壁はレンガ積みで、側壁はイギリス積み、アーチ部は長手積みとなっており、天井部の一部に‘縦積み’という技法が採られています。覆工背面は、栗石が裏込め材として充填され、地下水の排水の役目や地山からの土圧を均等に受け持つよう工夫されています。使用されているレンガの産地は、表面の刻印などから泉州地方とされ、当時は大阪湾を船で運び、湊川の川尻あたりから陸送されたと推定されます。覆工の厚みは、レンガの長手方向に3個分（約70センチ）あり、全周の列数は、239列である。このことから隧道全体で少なくとも400万个以上のレンガが使用されています。

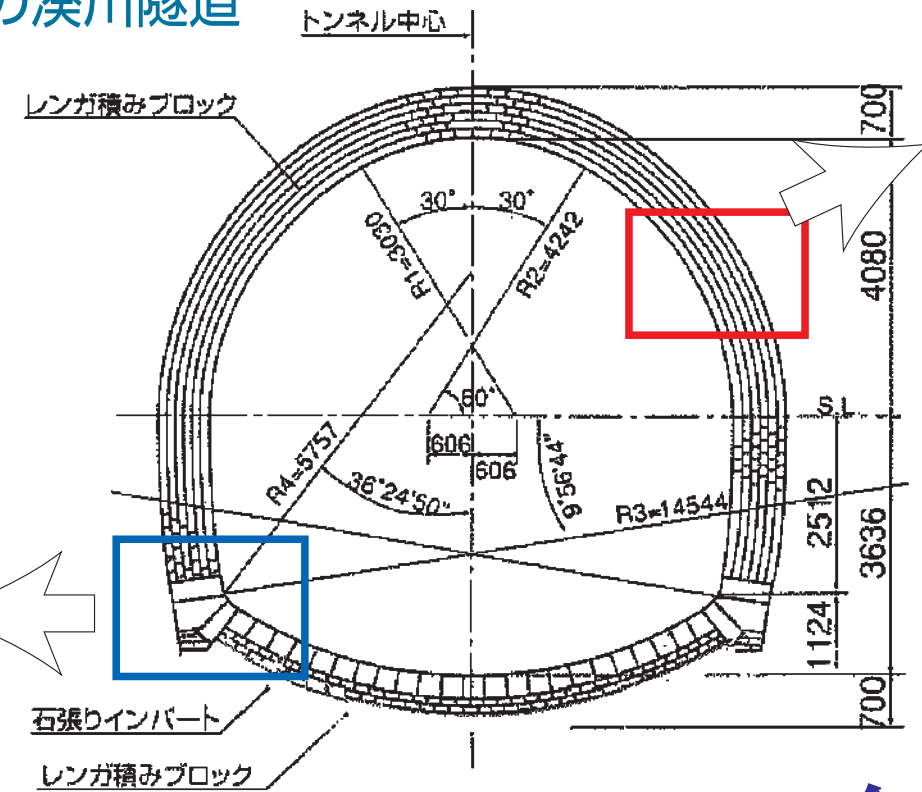


上流側坑門の要石

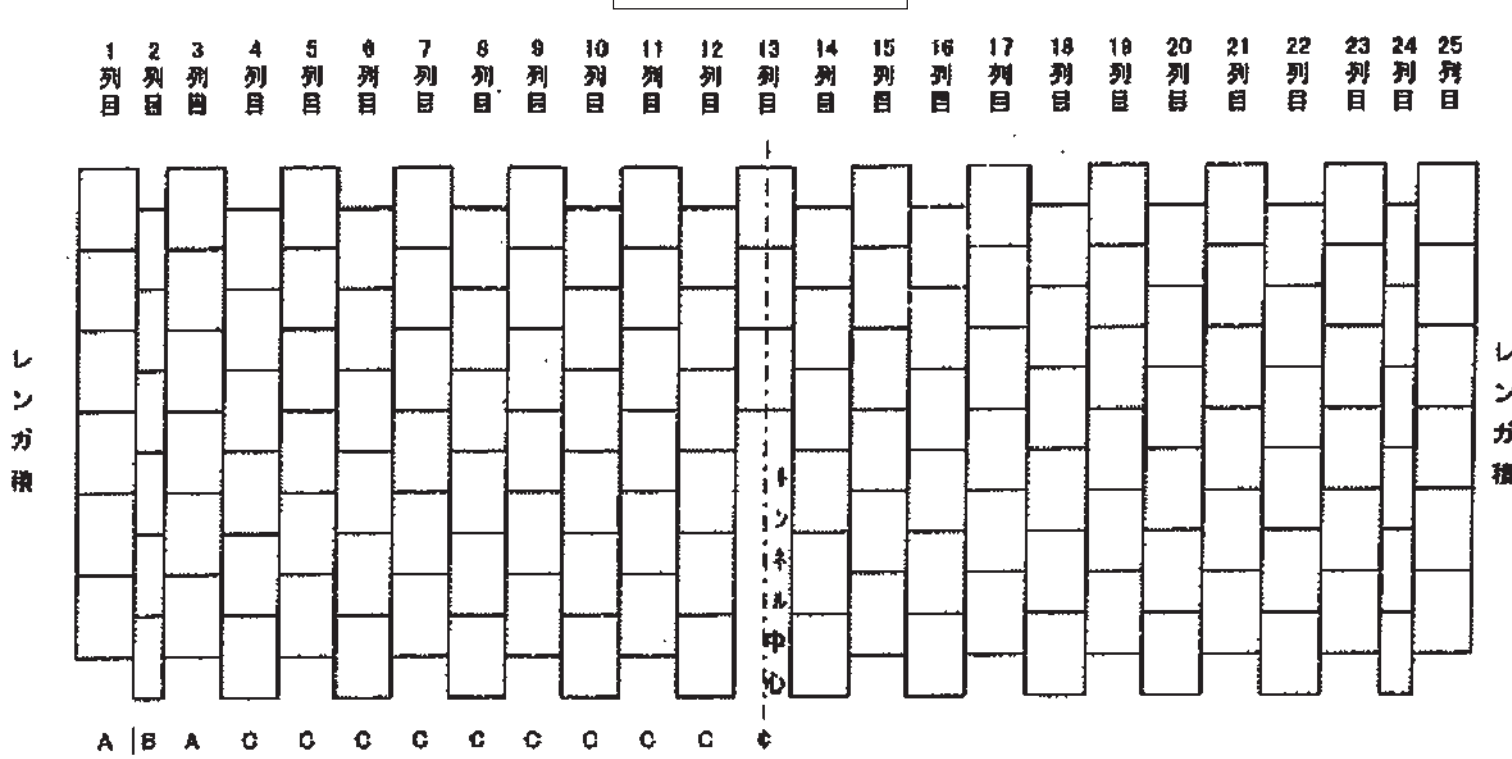
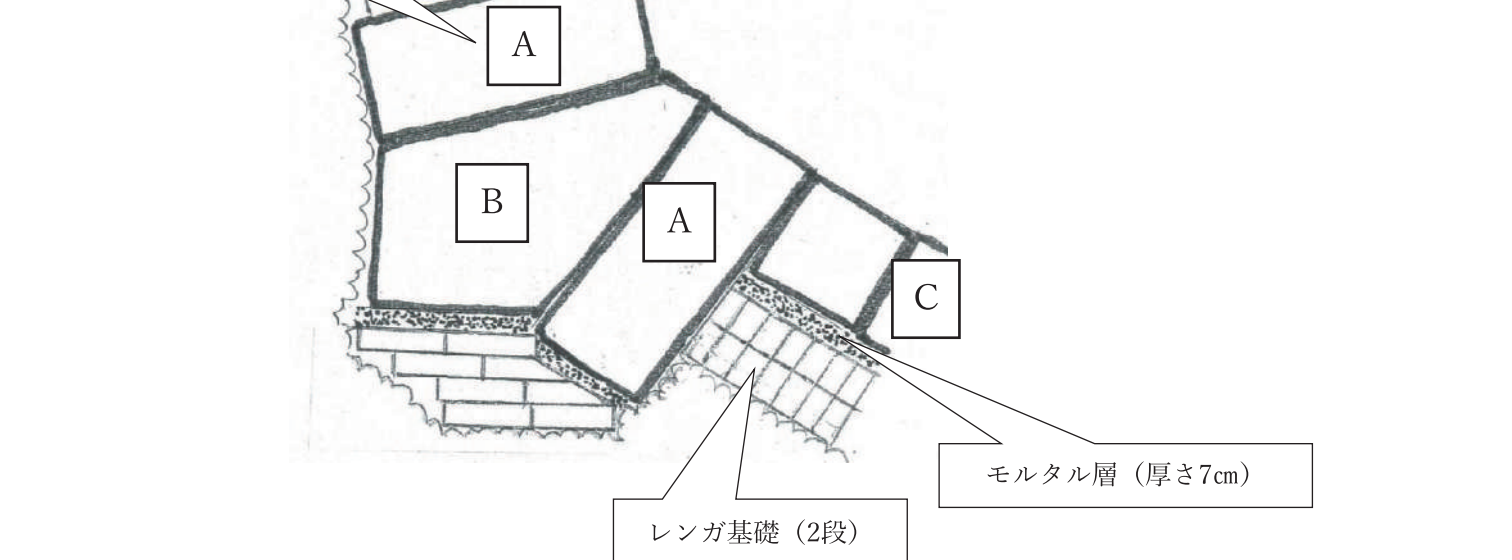
湊川隧道は明治34年に完成するが、昭和3年、神戸電鉄有馬線の鉄道敷設で隧道が上流側に延伸されたため完成当時の坑門は埋没した。震災後の新湊川トンネル工事の仮設工事で運良く坑門が発掘されたので、この要石は湊川隧道入口横に記念碑として展示されている。



(『こうべ 神戸市制 100 周年』)



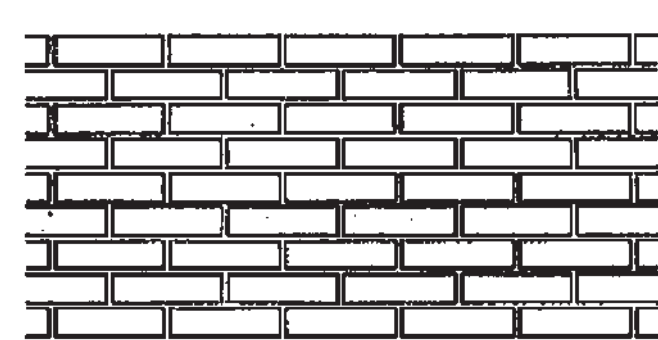
端部の切石配置



インバート部の切石配置

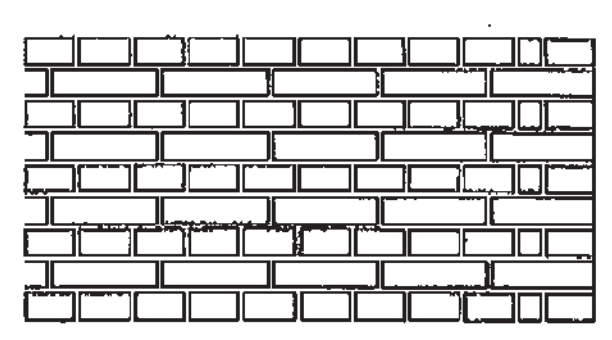
今でも神戸市内の街中に残る古いレンガ積み

〈長手積み〉



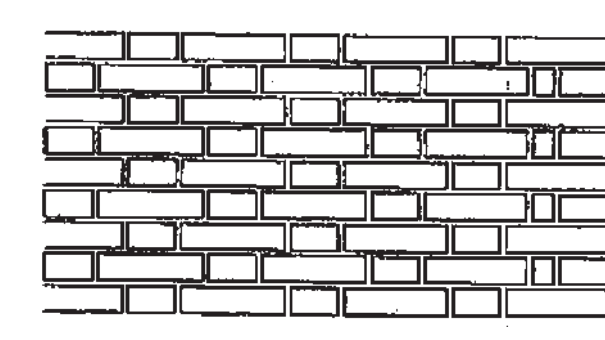
(長田区本庄町)

〈イギリス積み〉



(中央区東川崎町)

〈フランス積み〉



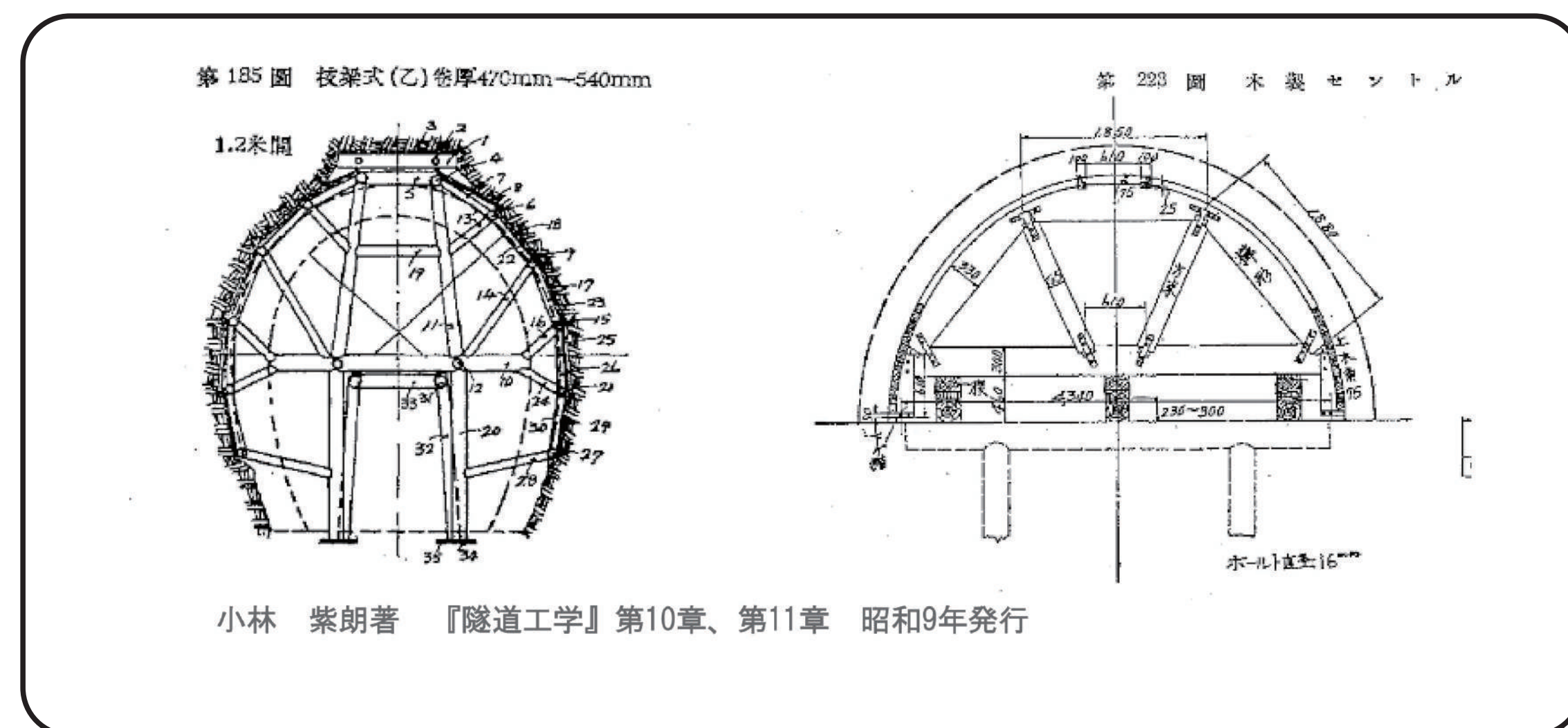
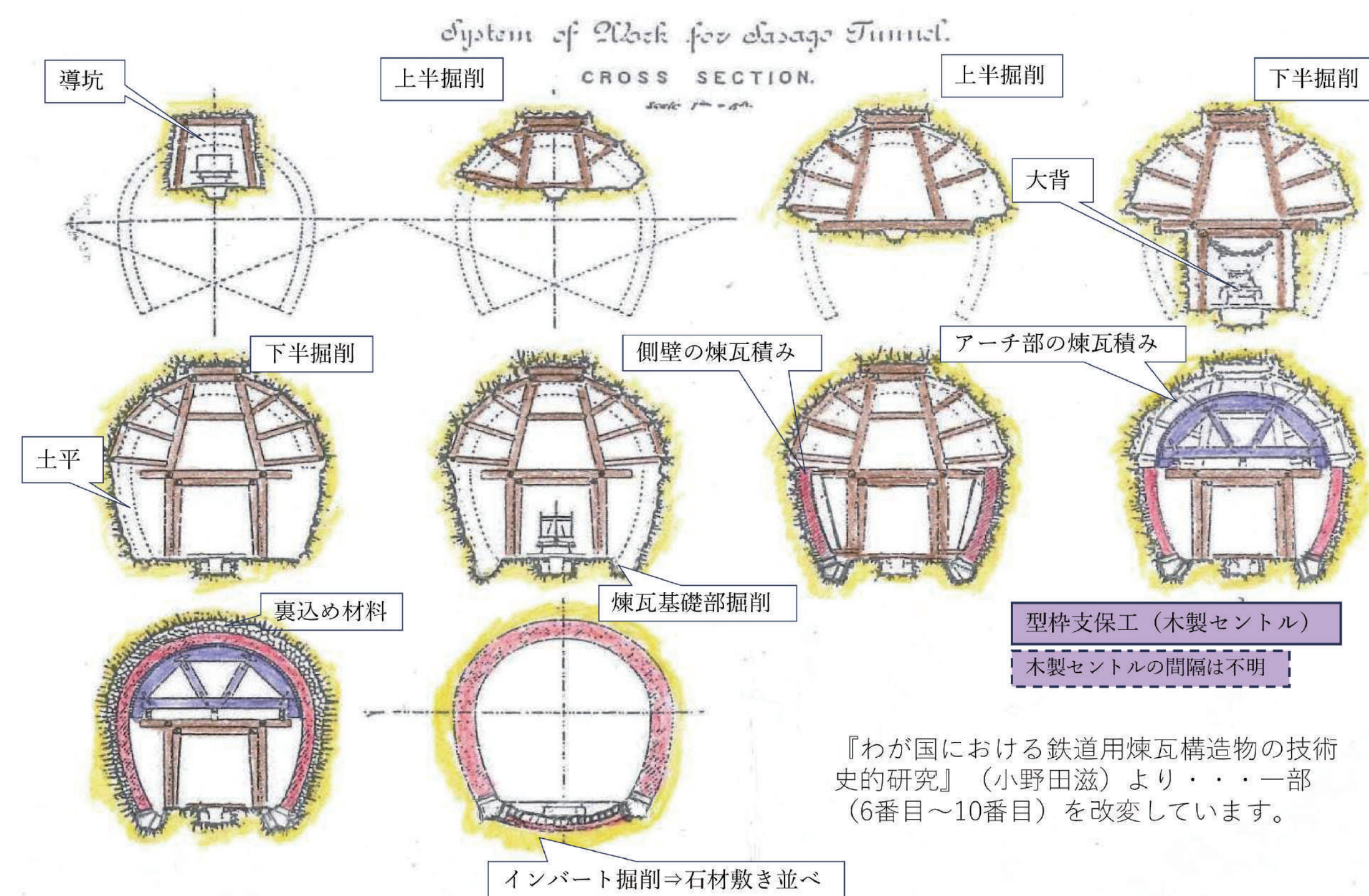
(長田区梅ヶ香町)

これらレンガ積みは、神戸大空襲、阪神淡路大震災という二度の災禍を耐え抜いている。

湊川隧道の工事について

施工方法

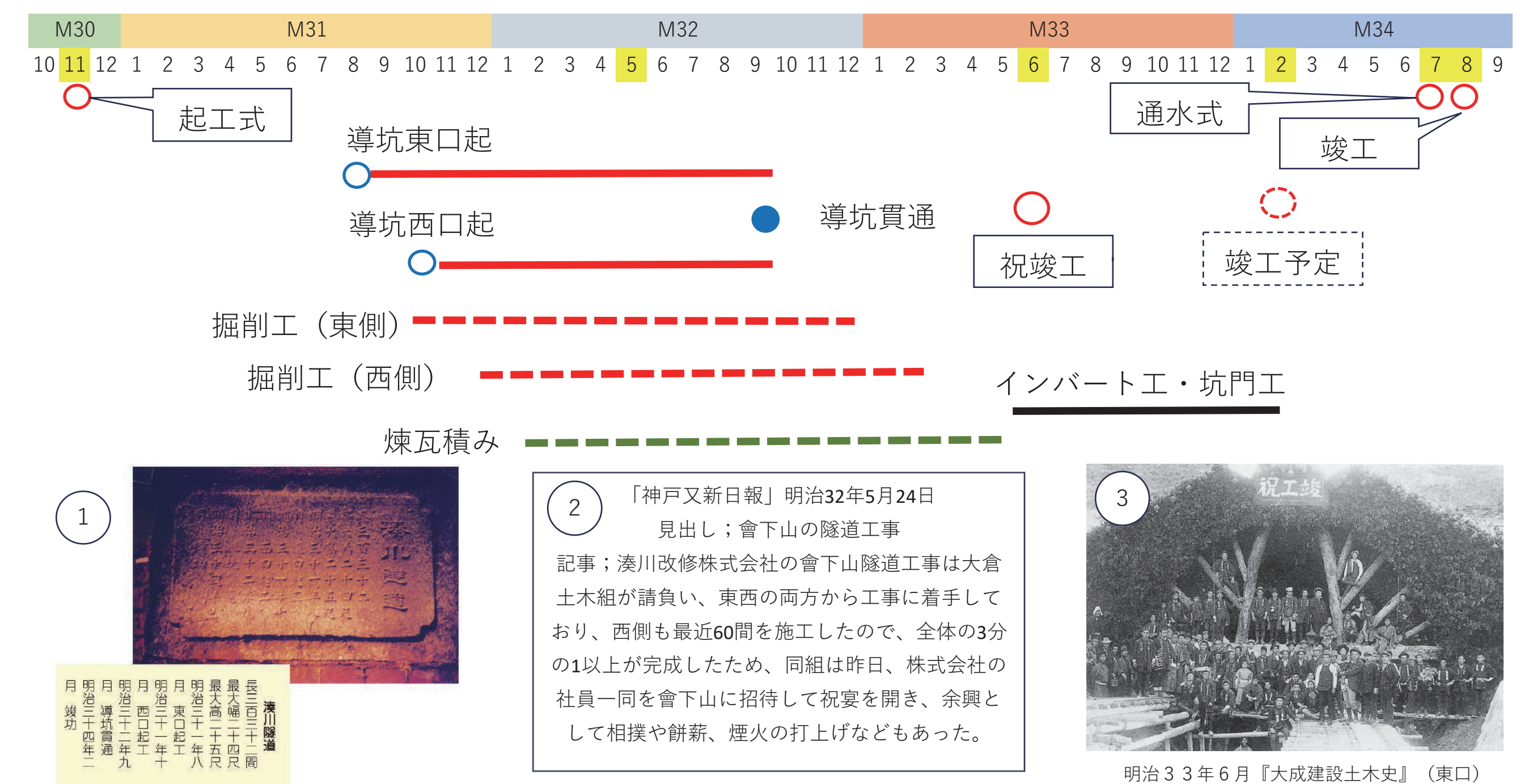
湊川隧道の工事の状況は、施工記録がないため不明です。明治期になり、鉄道建設が全国で行われるようになるとトンネル技術も進歩しますが、湊川隧道の大きさは、鉄道トンネルと比較すると高さ・幅とも大きく、掘削、煉瓦覆工、インバート等の施工には苦労も多かったと思われます。湊川隧道の大きさは当時、世界最大級とされていますが、明治35年に完成した笹子トンネルの事例から湊川隧道の施工方法を類推します。



工事工程

湊川隧道の工事の状況が不明であると同じように工事の工程も不明ですが、湊川隧道の中間地点に設置された工事銘板や数少ない資料から下記のような工事工程を推測します。

3つの情報から（①銘板に記された工期、②新聞記事、③祝竣工写真）から工程を推測できます。



左の写真は、湊川隧道の工事中的写真です。撮影日は明治32年2月6日西口（下流側）とありますから上表から掘削を開始して半年後あたりと思われます。この写真から上半掘削と下半掘削が並行していることや支保工の様子がわかります。また、現場の掘削法面の状況から大阪層群の地層の性状がよくわかります。この写真は、令和6年8月に大成建設株式会社広報室から提供された貴重な写真です。ちなみに、大成建設（当時;大倉土木組）の東京の本社に保管されていた明治期の湊川隧道の工事記録は全て関東大震災で焼失したとのことでした。

湊川付替えに関わった人達

明治維新後、国際貿易港として発展する神戸では、地元の豪商神田兵右衛門や北風正造らは湊川付替えの必要性を早くから提唱していました。その理由は、流出土砂による神戸港埋没のおそれ、度重なる湊川の氾濫、湊川の堤防が東西交通の障害になっていたことです。明治29年4月に小曽根喜一郎、神田兵右衛門、大倉喜八郎らは、「湊川付換之儀付願」を申請します。当初の計画では、会下山の南麓を流し長田村で苅藻川に合流させることにしていましたが、氾濫を恐れた新河道沿いの住民の反対もあって会下山の下をトンネルで通すことになります。湊川を改修するという公共事業を民間人の手で行うことに対する反対運動もありましたが、明治29年8月末の豪雨が契機になって湊川の付替えが決定します。付替え工事は、前述の実業家たち32名が発起人となった民間会社の湊川改修株式会社が行います。付替え工事は、小曽根喜一郎、大倉喜八郎、藤田伝三郎ほか多くの地主や実業家による画期的な民間事業でした。付替え後、埋め立てられた土地は後に湊川新開地として発展します。

湊川改修株式会社のメンバー

住 所	氏 名	備 考
*神戸市		
<湊西区> 湊 町	小曽根 喜一郎	神戸財界の重鎮、金融・貸家業
	岸 本 豊太郎	金融業、銀行家
磯ノ町	大 野 輝 吉	醫師
	澤 野 完 七	米穀問屋業
門口町	池 長 通	河原屋、質商
匠 町	澤 田 清兵衛	米穀商、日本商業銀行取締役、日本米穀株式会社
永澤町	岡 田 元太郎	米穀商兵庫運輸株式会社取締役
江川町	藤 田 松太郎	土木・建築功労者
出在家町	神 田兵右衛門	兵庫港経済の再建に努める
<湊区> 石井村	谷 勘兵衛	農・燐寸製造業、湊川改修株式会社取締役
<湊東区> 相生町	小 野 健四郎	辰巳屋、酒造業
	波 多 野 央	
多聞通	柴 仁兵衛	資産家
楠 町	直 木 政之介	燐寸輸出
<神戸区> 元町通	横 田 考 史	薬剤業界の開祖
	生島四郎左衛門	羊毛織物商
	濱 田 篤三郎	雑貨貿易商
	丹 波 謙 蔵	洋品雑貨商
	桑 田 彌兵衛	網干屋、酒・醤油商
中山手通	飯 田 勇 記	弁護士
栄町通	池 田 貴兵衛	電気産業
山本通	神 代 郁之進	
	渡 邊 尚	新聞社
	藤 井 一 郎	湊川改修株式会社取締役社長
下山手通	鹿 島 秀 磨	新聞社
*大坂市		
<北区> 堂島北町	藤 田 伝三郎	建設業、藤田組取締役社長
中ノ島	久 原 庄三郎	藤田組取締役員
	土 居 通 夫	大阪商業銀行頭取，大阪電燈株式会社社長
<西区> 靱北通	斎 藤 幾 太	
	田 中 市兵衛	
	田 中 市太郎	
*東京市	大 倉 喜八郎	貿易商、建設業、東京の財閥

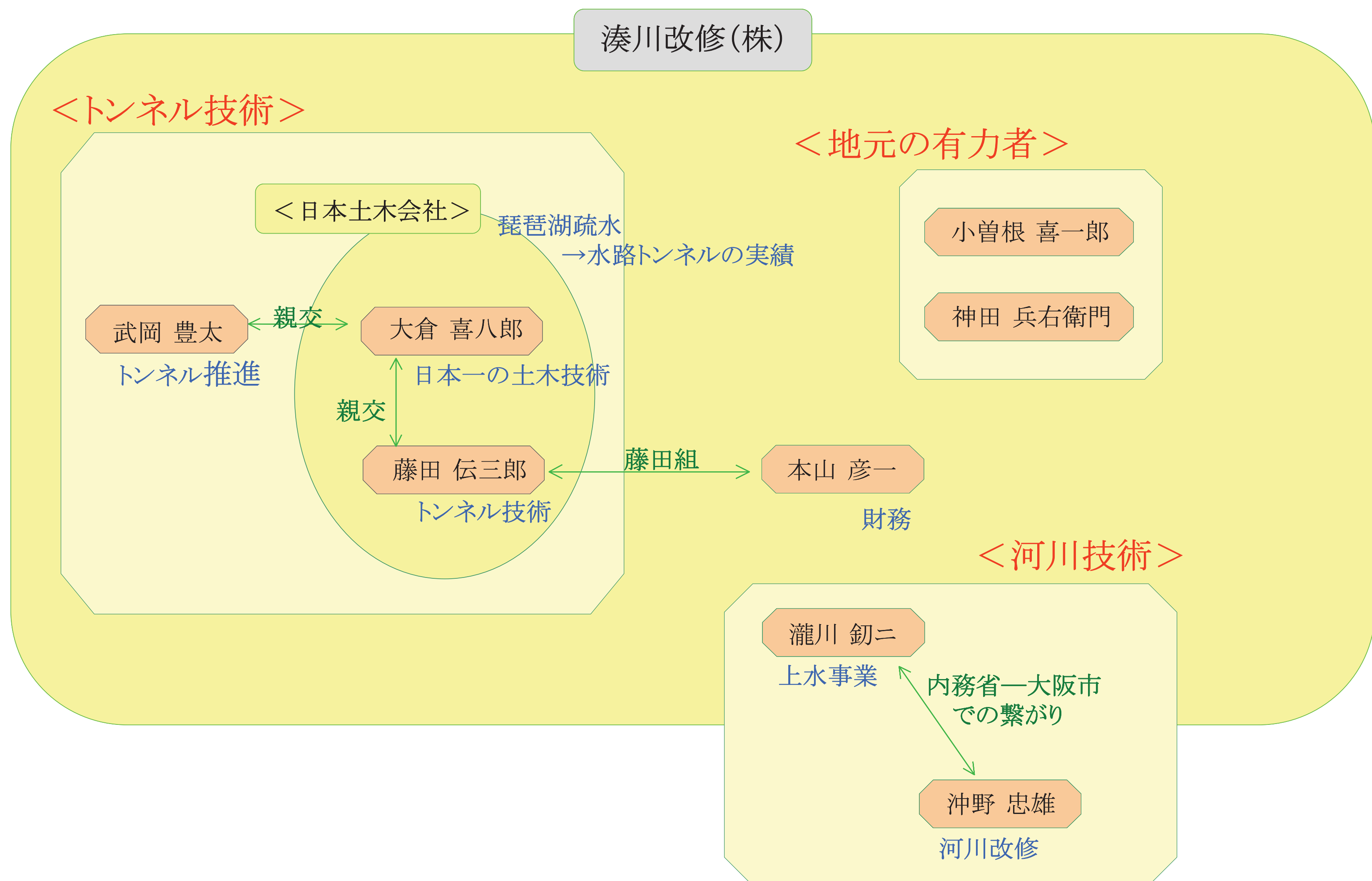
(『明治期の民間会社による河川改修事業の計画と施工過程 ―湊川改修株式会社―』吉村愛子、神吉和夫)

湊川付替え年表

明治元	地元の有志が政府要人に現地視察を願ったが、	北風正造、藤田積中ら。
	実現せず。	
10年	横浜と神戸の改修の計画に伴い、湊川の付替えが世論にのぼり始める。	
15年	神戸区長、県に付け替え工事の実測を願う。	
17年10月	「兵庫湊川河道変換之儀」	湊川起点より市街地を避けて南下し、苅藻川尻へ抜く流路計画。北風正造、藤田積中ら7名の出願に、兵庫区長の副申を付けて、兵庫県令宛に申請。
20年5月	「兵庫湊川々路変換ノ儀二付請願」	北風正造、藤田積中ら21人が兵庫県知事宛申請。
6月	「湊川附換之儀御願」	藤田伝三郎が個人で兵庫県知事に申請。兵庫県知事より、すべて私費でなら許可の支持を受ける。
21年3月	「湊川付換ノ儀二付再願」	出願人を増やし、組合として出願。（藤田伝三郎ら7名）会下山の南、皿池の北川を、通って苅藻川へ達する流路。
28年	「会下山南部地区住民が計画に反対し、陳情書を提出」	
29年4月	「湊川付替之儀付願」	計画の修正。クッター式の採用。小曽根喜一郎ら23名の出願に、神戸市が副申を付けて兵庫県知事に申請。
8月	神戸地区に大水害が起こる。	改修計画実現の直接のきっかけとなる。
10月	「湊川付換工事之儀二付上申」	会下山をトンネルで通す流路へと変更。
12月	「湊川流域付換命令書并請書」	兵庫県知事が、小曽根喜一郎ら32名に対し、湊川付替えを許可。
30年8月	「湊川附換工事設計変更之儀二付願」	断面形状が馬蹄形に変更。
10月	起工	
34年8月	竣工	

湊川付替えに関わった人達

湊川改修事業における人物関係図



湊川の付替えに関わった主な人物紹介

湊川の付替えという大事業には地元の有力者はじめ当時を代表する実業家が関わっていますが、以下、主な人物を紹介します。

こう だ ひょううえもん
神 田 兵右衛門 (1841 ~ 1921)

播州大塩村に生まれ、兵庫の旧家神田家の養子になり、明治維新後、兵庫津名主、区長などを歴任しながら、青少年の教育が必要と考え「明親館」を開校する。当時、海の難所とされた和田岬沖の航行と迂回の不便を解消するため、巨額の私財をつぎ込み新川運河を明治8年に完成させた。明治22年神戸市制が施行されると初代市会議長を勤める。神戸市の水道事業の推進に積極的に携わる一方で、湊川の付替え事業の必要性を早くから提唱し「湊川改修株式会社」の設立にも関わるなど、神戸の三大土木事業とされるインフラ整備を担っている。

お ぞ ね きいちろう
小曾根 喜一郎 (1856 ~ 1937)

神戸の松本家の子として生まれ、幼名直太郎。金融、貸家業を営んでいた先代の小曾根喜一郎の養子となり、明治17年に家督を継ぐ。先代時代の貸金の回収で得た資金を元に土地を購入し大地主となる。明治中期より湊川の付替え事業に関わり湊川改修株式会社の設立に神戸を代表する実業家の一人として加わっている。その後、産業界に進出して日本羽二重社長、神戸米穀取引所理事長、帝国水産社長、阪神電鉄、日本毛織、播磨ドックなどの多くの会社に関係し、神戸財界の重鎮として活躍する。

た け お か と よ た
武 岡 豊 太 (1864 ~ 1931)

淡路島三原郡に生まれ、14才で小学校の補助教員、明治19年に県議会議員であった藤井一郎が明石郡長に就任した時、郡役場の学務係に抜擢される。その後、渡辺徹明石郡長の知遇を得て28才で兵庫共済株式会社の社長になり、和田岬にあった和楽園の経営を任される。湊川改修株式会社が設立されると、藤井一郎が社長に、豊太は支配人として工事計画と経営に当たり、付替えられた湊川跡地の新開地造成も支配人として会社経営を取り仕切った。大正4年に神戸市会議員になる一方で、楽山と号して国史の研究や浮世絵の収集にも意を注ぎ、郷里の公会堂建設に寄付するなど慈善事業、社会事業に尽くした。

お お く ら きはちろう
大 倉 喜八郎 (1837 ~ 1928)

越後に生まれ、安政年間に江戸に出て乾物店、鉄砲店を開く。戊辰戦争で事業を発展させて巨利を博した。明治5年に民間人として初めて欧米に商業視察する。明治6年に帰国後、大倉商会を設立し、西南戦争、日清・日露戦争では軍需物資調達で巨利を得る。大正時代には大倉商事、大倉鉱業、大倉土木を中核とした大倉財閥の体制を確立し、大日本麦酒、日清製油、帝国劇場など多くの分野に事業を拡大し、渋沢栄一と東京商法会議所を設立するなど財界で活躍した。当時安養山に所有していた別荘の跡地は神戸市に寄付され、大倉山公園になっている。

ふ じ た でんざぶろう
藤 田 伝三郎 (1841 ~ 1912)

長州萩に生まれ、維新後は大阪に出て軍靴製造を主とする御用商人になり、西南戦争で巨額の富を築く。伝三郎と湊川の関わりは、明治20年6月に兵庫県知事宛に「湊川附換之儀御願」を申し出たことに始まるが、当時、藤田組は琵琶湖疏水のトンネル工事を請け負っている。明治29年頃から湊川付替えがさかんに議論されるようになり、湊川改修株式会社の設立に大倉喜八郎らと名を連ねる。また、多方面の会社経営に携わり、五代友厚らと大阪商法会議所の設立に貢献する一方で、児島湾干拓や大阪築港等の公共事業にもかかわり巨額の私費を投じている。

(『兵庫県人物事典』のじぎく文庫、『国史大辞典』吉川弘文館 ほか)

古湊川はどこを流れていたのか

現在では、付替えられる前の湊川を'旧湊川'と呼んでいますが、上沢、下沢、永沢、三川口、柳原といった川や湿地を思わせる地名が旧湊川から約500m西方の地域で南北に分布しています。そこで旧湊川となる以前にこの位置を湊川が流れていたと考え、その川筋を歴史の世界では'古湊川'と呼んでいます。さて、この古湊川がいつ、誰によって付替えられて旧湊川の流路になったかは今でも不明です。以下、既往の資料で、古湊川から旧湊川への付替えに対する所見を紹介します。

『福原びんかがみ』（1680）には、
「昔は兵庫より西に有之由申傳、いつの比川筋替たるか、所の者年数おぼえず」とあります。

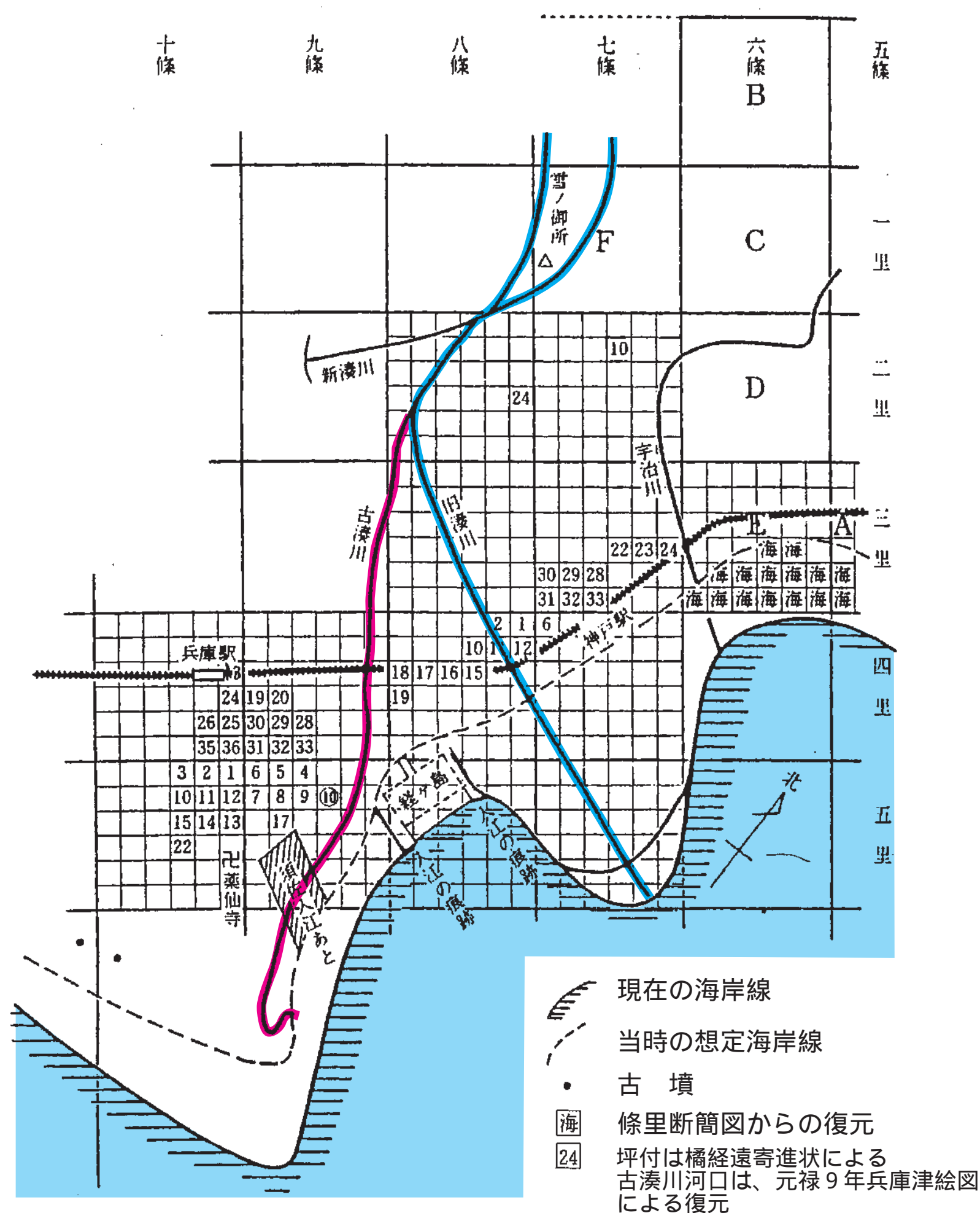
『摂津名所図絵』（1796）には、
「湊川……古は石井より会下山の麓を西へ流れ、兵庫の町の西より大和田濱にて海に入る。平相国兵庫築島せらるるの時、洪水の難を避けん為に、今の如く川違ありしなり」とあります。

『西摂大観』（1911）には、
西摂大観では、明治に出された地名辞書が、『東鑑』『盛衰記』『平家物語』を引用し、当時既に今の如く湊川の東流たるを証すべしとしていることに對し、それに反論して『方丈記』『山塊記』などを引用し、「湊川の東流は寿永 前にあらざること」と記しています。
寿永 = 1182年～1183年

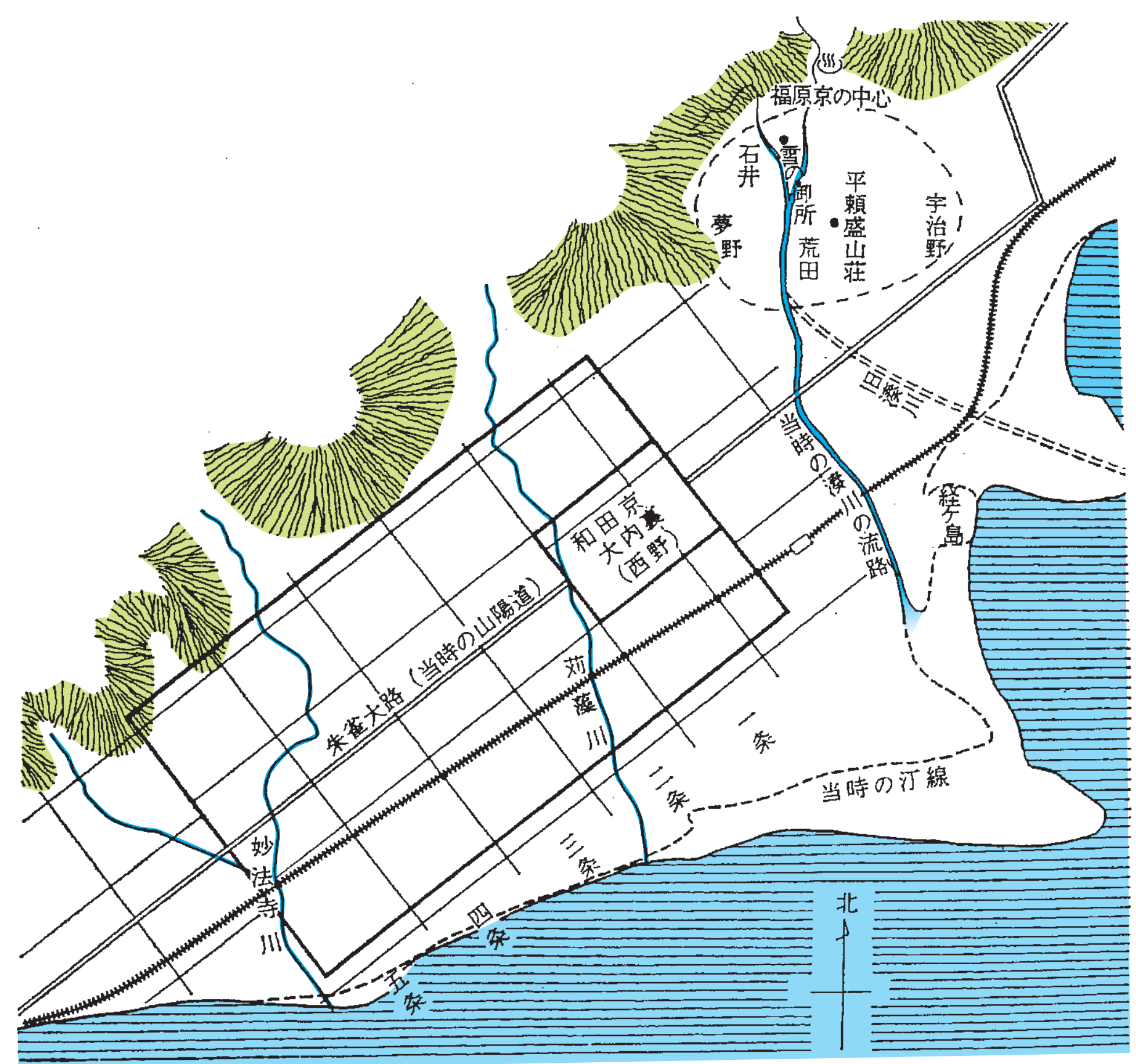
『神戸市史』（1921）には、
「湊川の名亦実に其の和田の湊に注げる川なることを示す。ただ問題は其の流路が何時の頃に東に転じて旧湊川をなすに至りたりしかにありて存するのみ」としながら、
「川崎に注げるものが必ず源平合戦以後のものたるべきは殆ど疑う余地なきものの如し」とあります。
さらに、「確に此の川が何時の頃に其の流路を変じたるかを知るべき史料を有せざるを遺憾とするのみ」「湊川の流路が源平合戦以後に於いて東に転じたりとの事は、西摂大観の説従うべし」と述べています。

『神戸市水害誌』（1939）には、
「流路の問題は川崎の出洲の土量が果たして幾年間に造成せられたるものかが解決せざれば、その年代は不明に終るであろう。今より260年前の市民が凡そ100年を経ざる池田氏の付替えに對し付替えの年次を知らずと伝えたに徴すると、或は池田氏以前の付替事業にあらざるなきか、研究に値する。」とあります。
（下線の部分の記述に対する一考察を別のパネルで紹介しています。）

このような書物を参考にすると、古湊川から旧湊川への付替えの時期を、清盛の築島建設時とするか、池田氏の兵庫城建設時とするかの二つの説に分かれます。



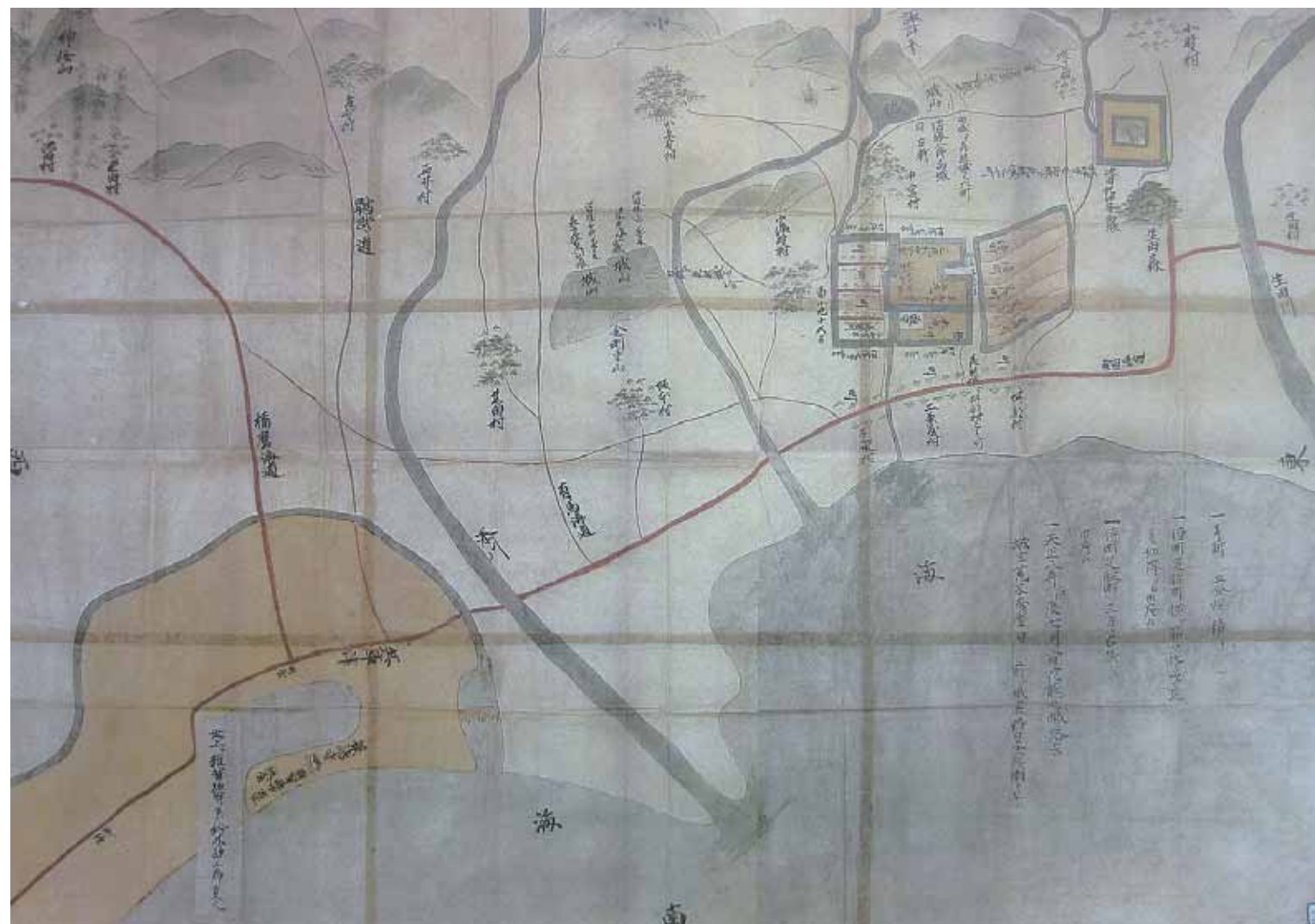
当時の海岸線の想定と経ヶ島の位置（落合作図）
（『兵庫の歴史～古代から幕末まで～』落合重信）



福原京および和田京計画想定図
（『兵庫の歴史～古代から幕末まで～』落合重信）

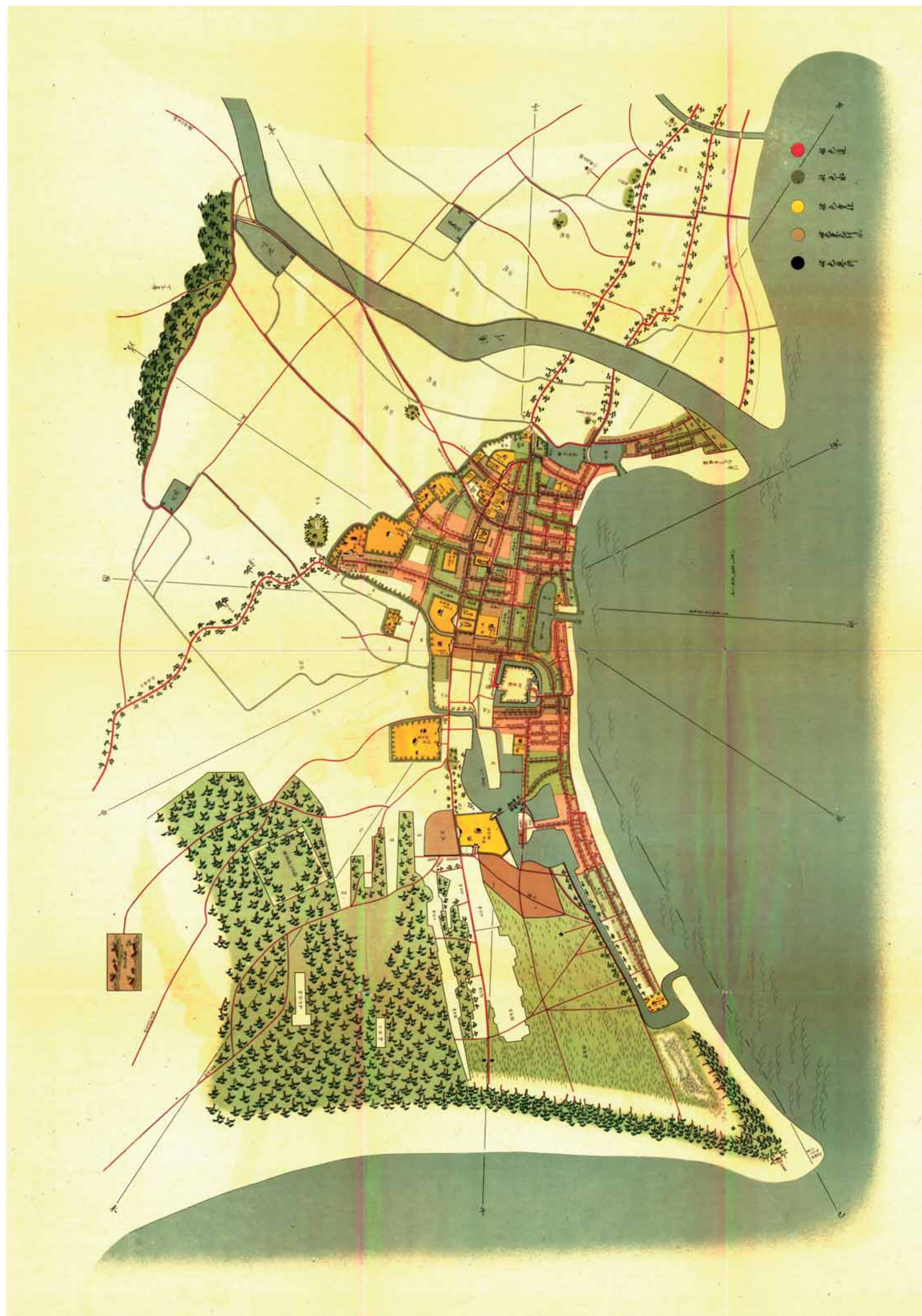
古湊川はどこを流れていたのか

～ 絵図で見る湊川 ～

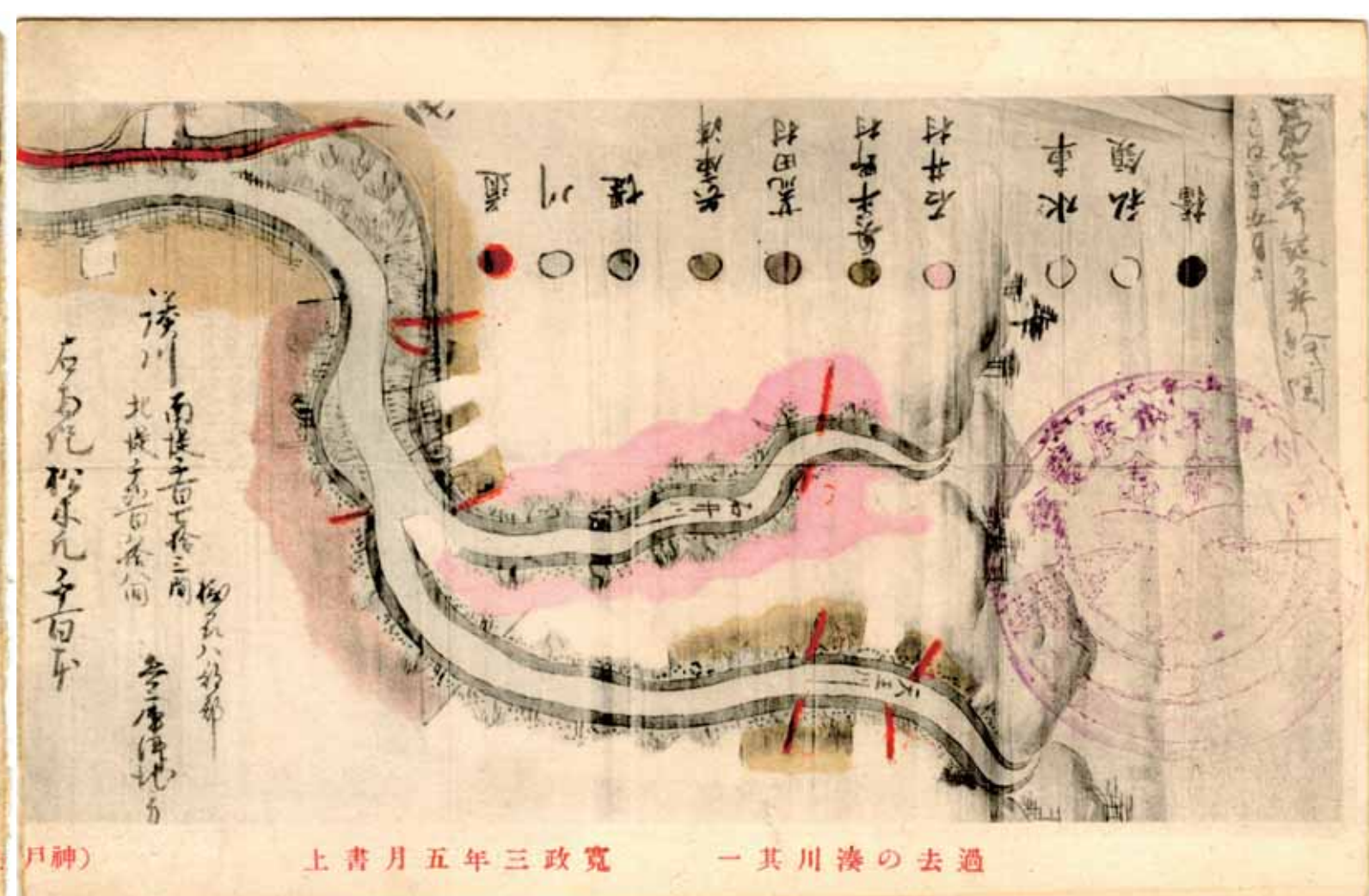
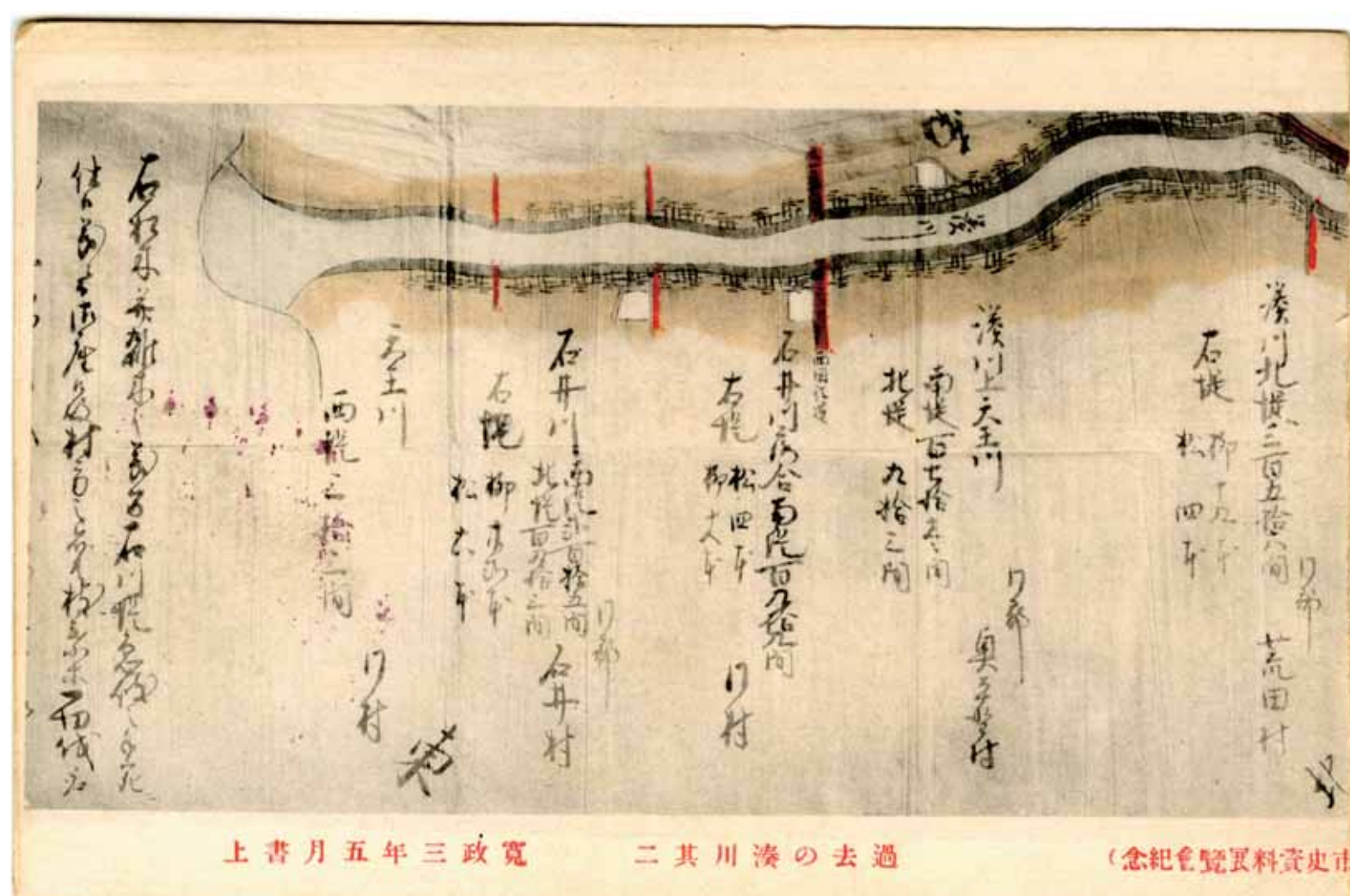


摂津国花熊城図（『兵庫県史』付図）

「この絵図は、花熊城を攻略した池田家に伝えられた絵図であり、花熊城とその城下町については詳細に記されているが、西国街道が兵庫津を通るのは慶長期（1596～1614）以降と考えられることから、当時の記録に作成時の情報が混在している可能性が高い（『よみがえる兵庫津』神戸市立博物館）」



摂州八部郡福原庄兵庫津絵図 元禄九年（1696）（『神戸市史』付図 1923）



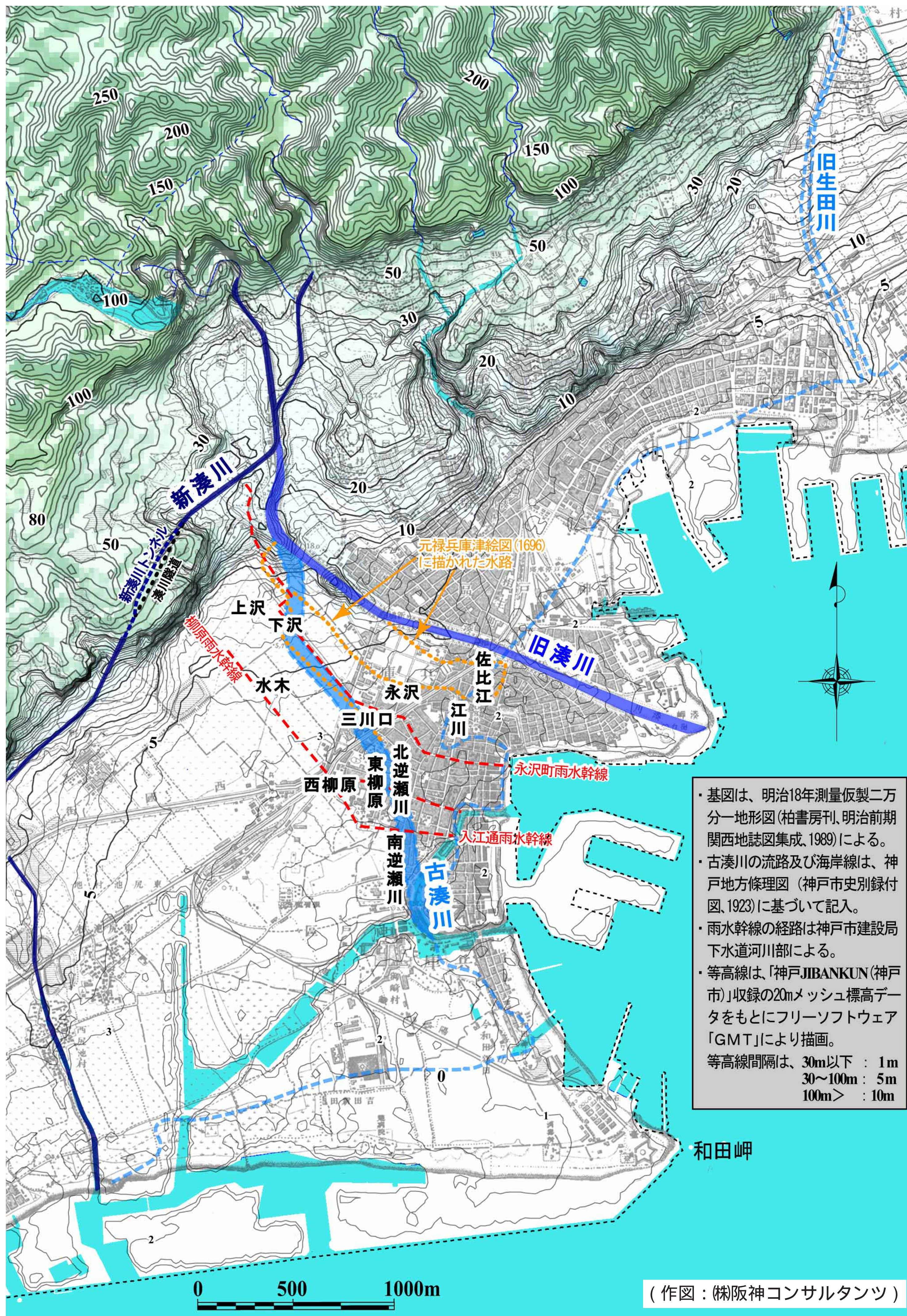
寛政3年（1791）に描かれた湊川

（絵葉書：八ヶ代信行氏提供）

古湊川はどこを流れていたのか

江戸期以降に出版された書物の中で古湊川の流路について記された一文を別のパネルで紹介していますが、下図にそれらの内容を現在の地形図に表示しています。

この図は、明治18年測量地形図をベースにして、現在の標高を示す「等高線」、神戸地方条里図（神戸市史別録付図1923）に記されている「古湊川の流路および海岸線」と川や湿地に由来すると思われる「地名」、「元禄兵庫津絵図に描かれた水路」、神戸市の「雨水幹線」を重ねたものです。



写真で見る湊川



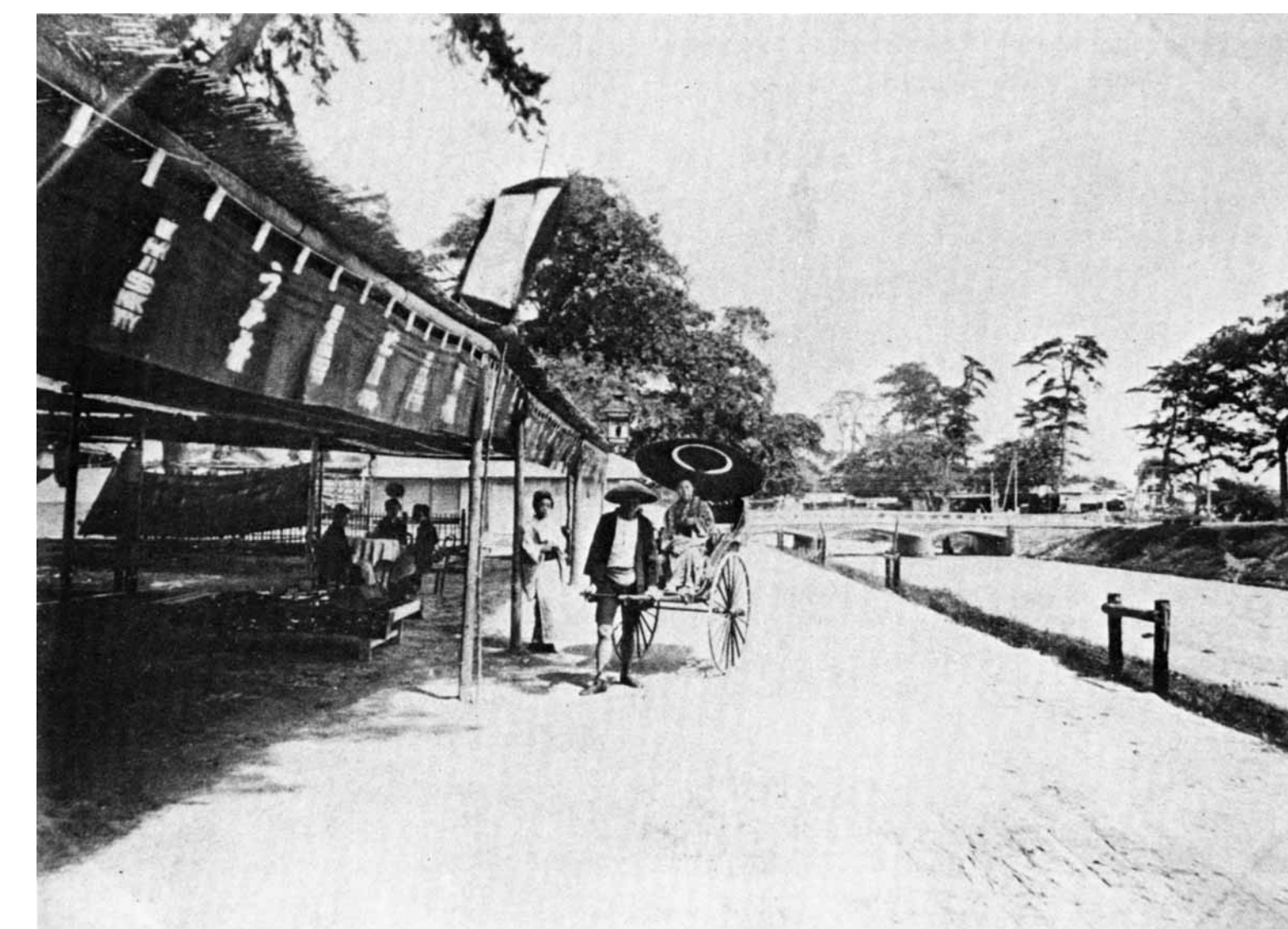
湊川に架けられていた橋



(絵葉書：ハヶ代信行氏提供)



(絵葉書：ハヶ代信行氏提供)



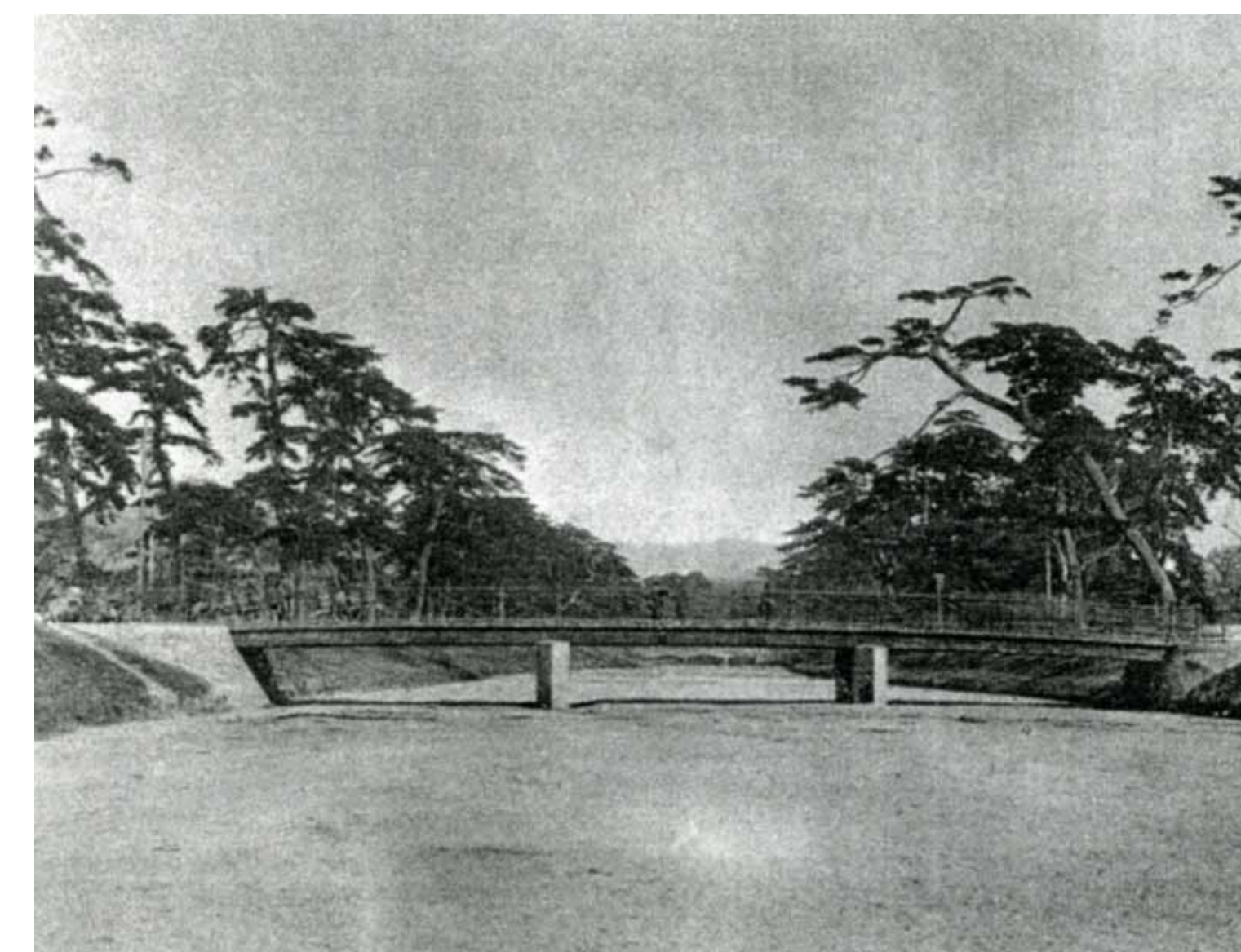
新橋付近の様子(『市民のグラフ こうべ』No17)



新橋付近の様子(絵葉書：ハヶ代信行氏提供)

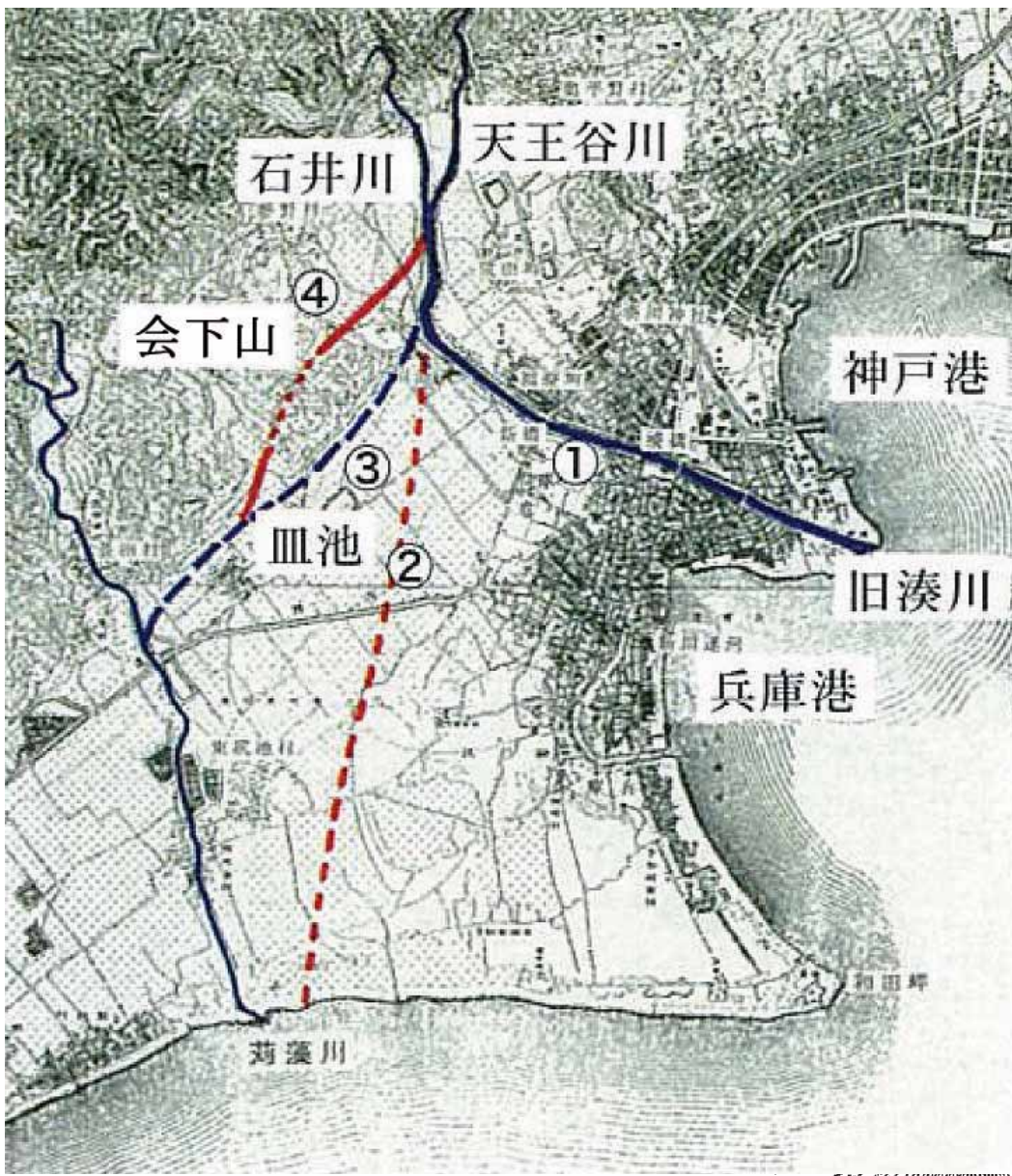


琴平橋付近の様子(『ふるさとの思い出 写真集 明治 大正 昭和 神戸』)



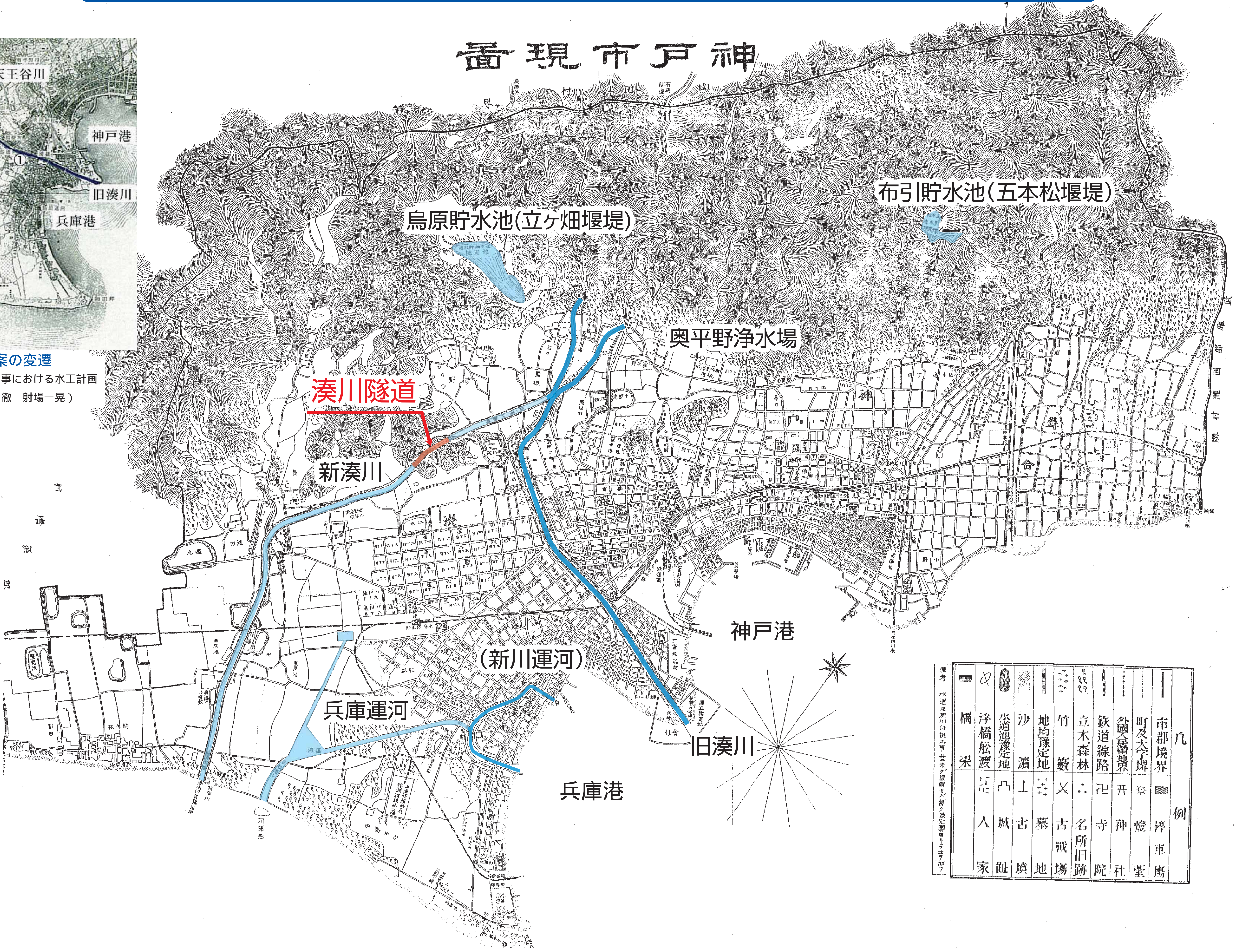
鉄製になった湊橋付近の様子
(『ふるさとの思い出 写真集 明治 大正 昭和 神戸』)

明治期における神戸の三大土木事業と湊川付替え



湊川改修計画案の変遷

(『明治期における湊川附換工事における水工計画
について』神吉和夫 神田徹 射場一晃)



明治30年、神戸の三大土木事業が進行中の神戸（『神戸開港30年史』）

湊川の堤防の切り下げと埋立



埋立が終わって間もない頃の湊川
(絵葉書：ハヶ代信行氏提供)



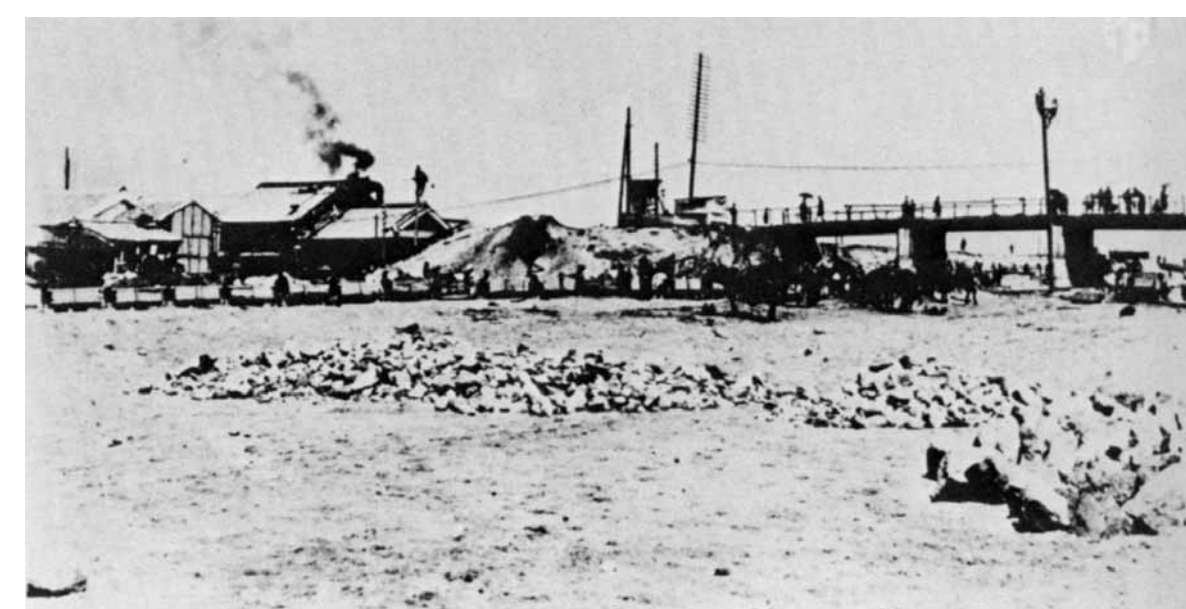
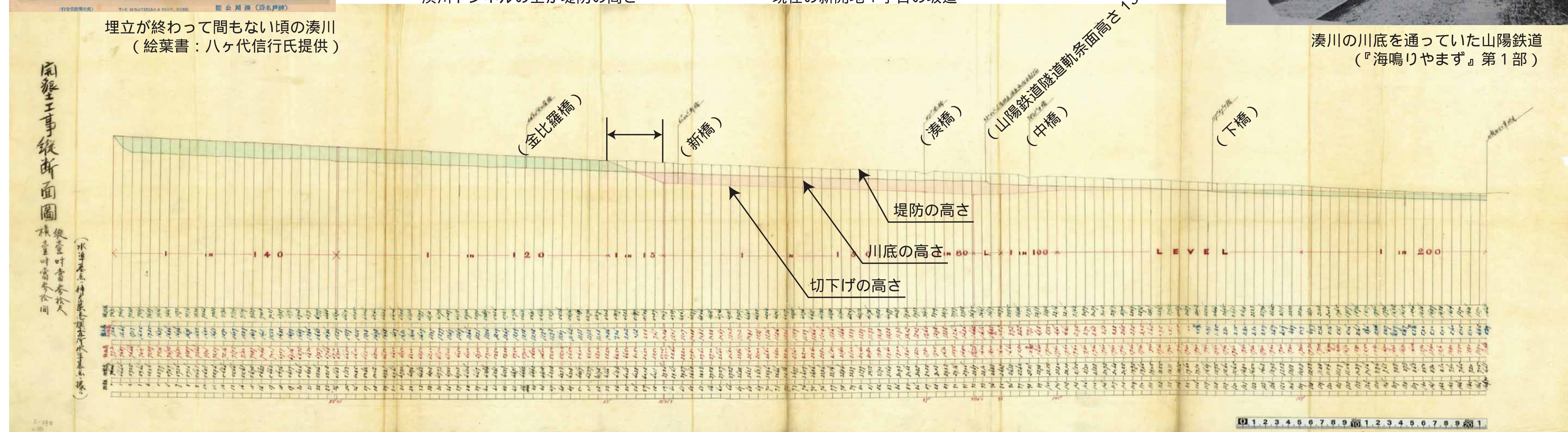
湊川トンネルの上が堤防の高さ



現在の新開地1丁目の坂道



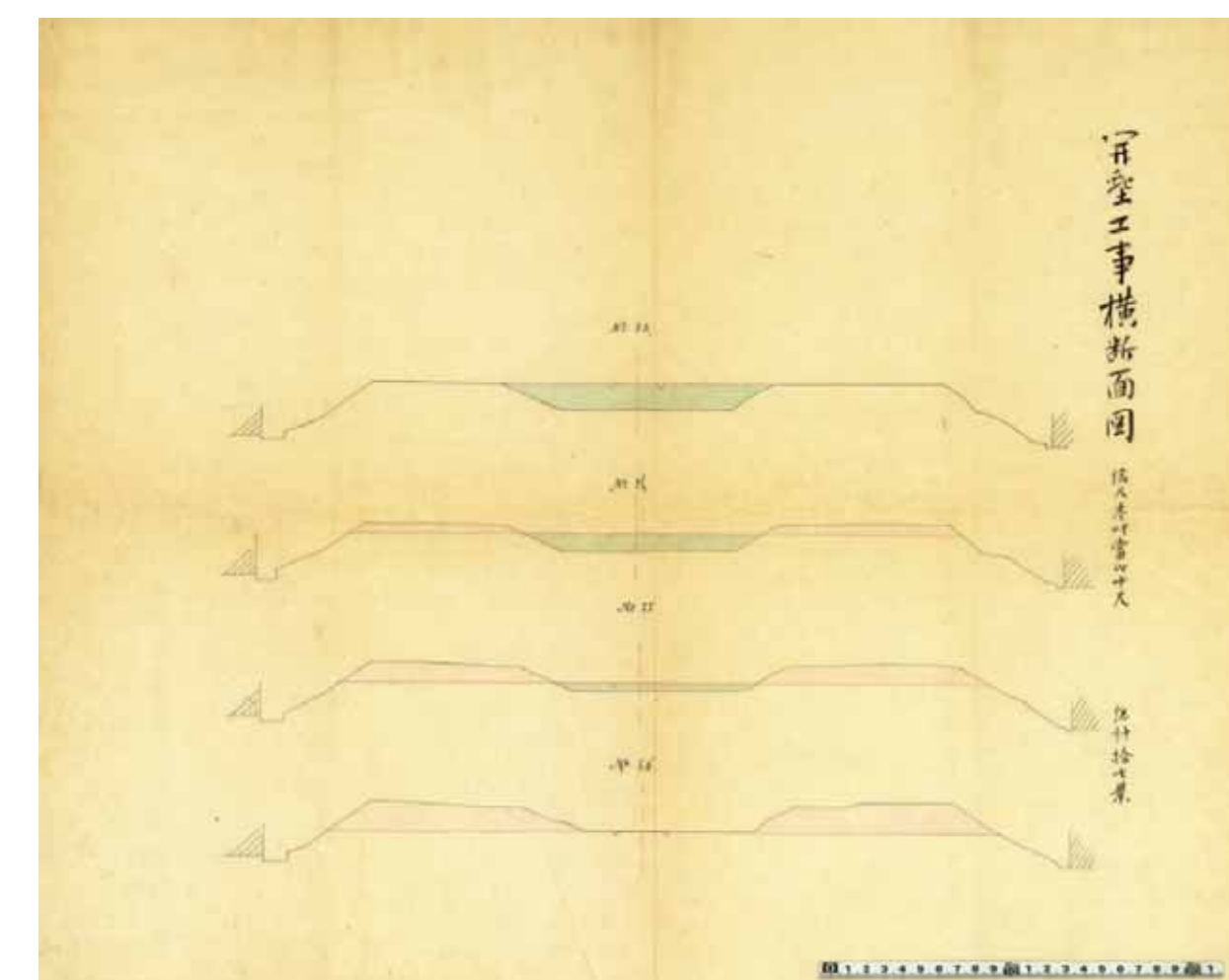
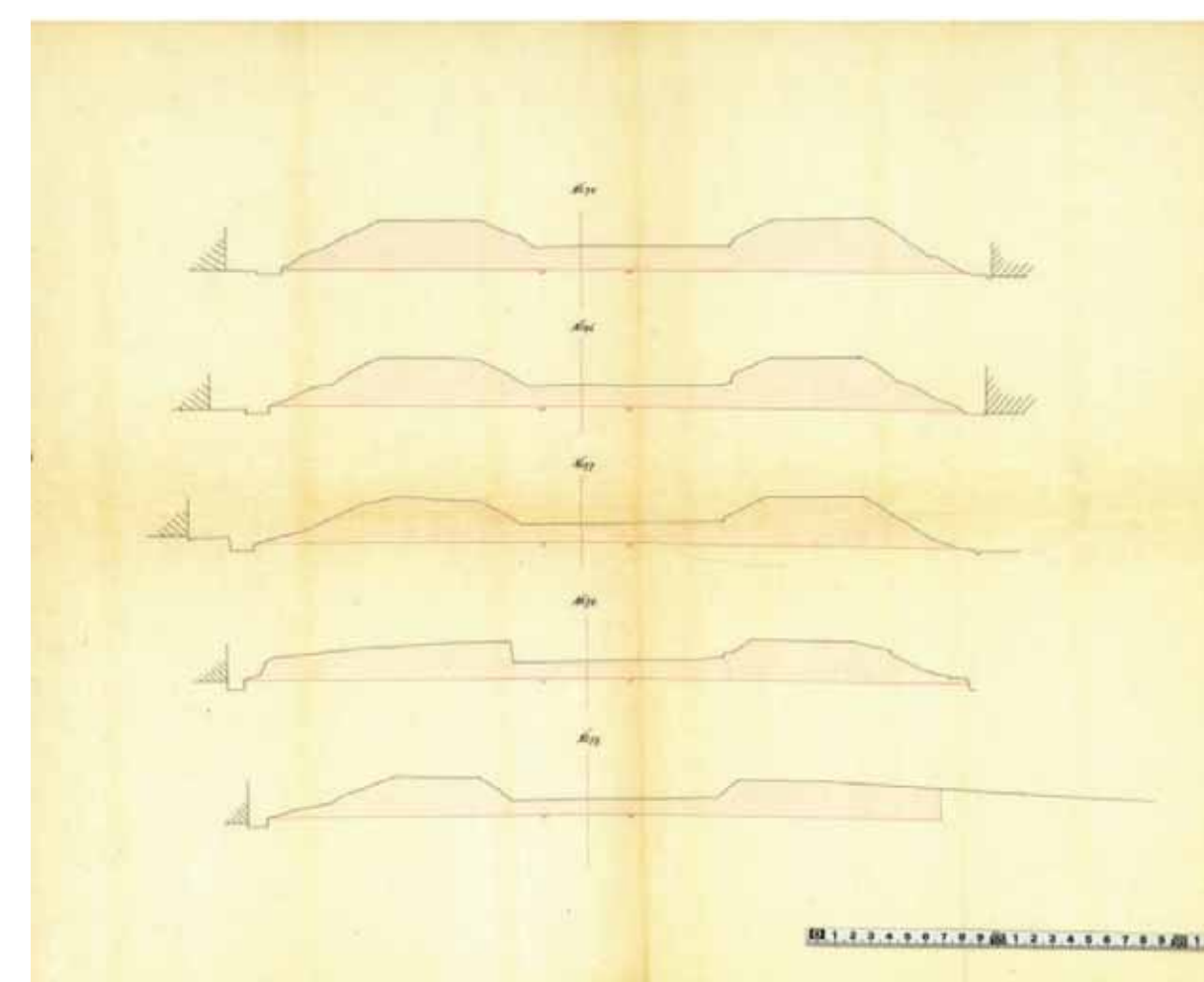
湊川の川底を通っていた山陽鉄道
(『海鳴りやまず』第1部)



付替えが終わる湊橋付近の堤防が取り壊されている様子
(『市民のグラフ こうべ』No17)



埋立工事中の湊川 中ノ橋上流を望む
(『市民のグラフ こうべ』No190)



(図面：神戸大学神吉和夫先生提供)

『旧川敷は旧新橋通の上手十六間の地点より川尻に至るをば兵神両市街地と平準に切り下げ、同地点より上流にありてはその一部をば十五分の一の斜面に切り取り、それより以上を河身を埋立堤防と同高平準となさんとし、明治三十八年十一月旧川切均工事全く成功す。』

(『明治工業史 土木編』昭和四年)

『かくて旧川敷は湊川公園では堤防と同高に聚楽館付近以下では川床と概ね同高に埋め立てられ、ために現在の如く新開地筋より左右に勾配をなして残った。』

(『神戸市水害誌』昭和十四年)

絵葉書で見る湊川公園と湊川新開地

(絵葉書：八ヶ代信行氏提供)



公園の北端に勸業館、東の堤防跡に野外音楽堂が見える



突き当たりの建物は勸業館



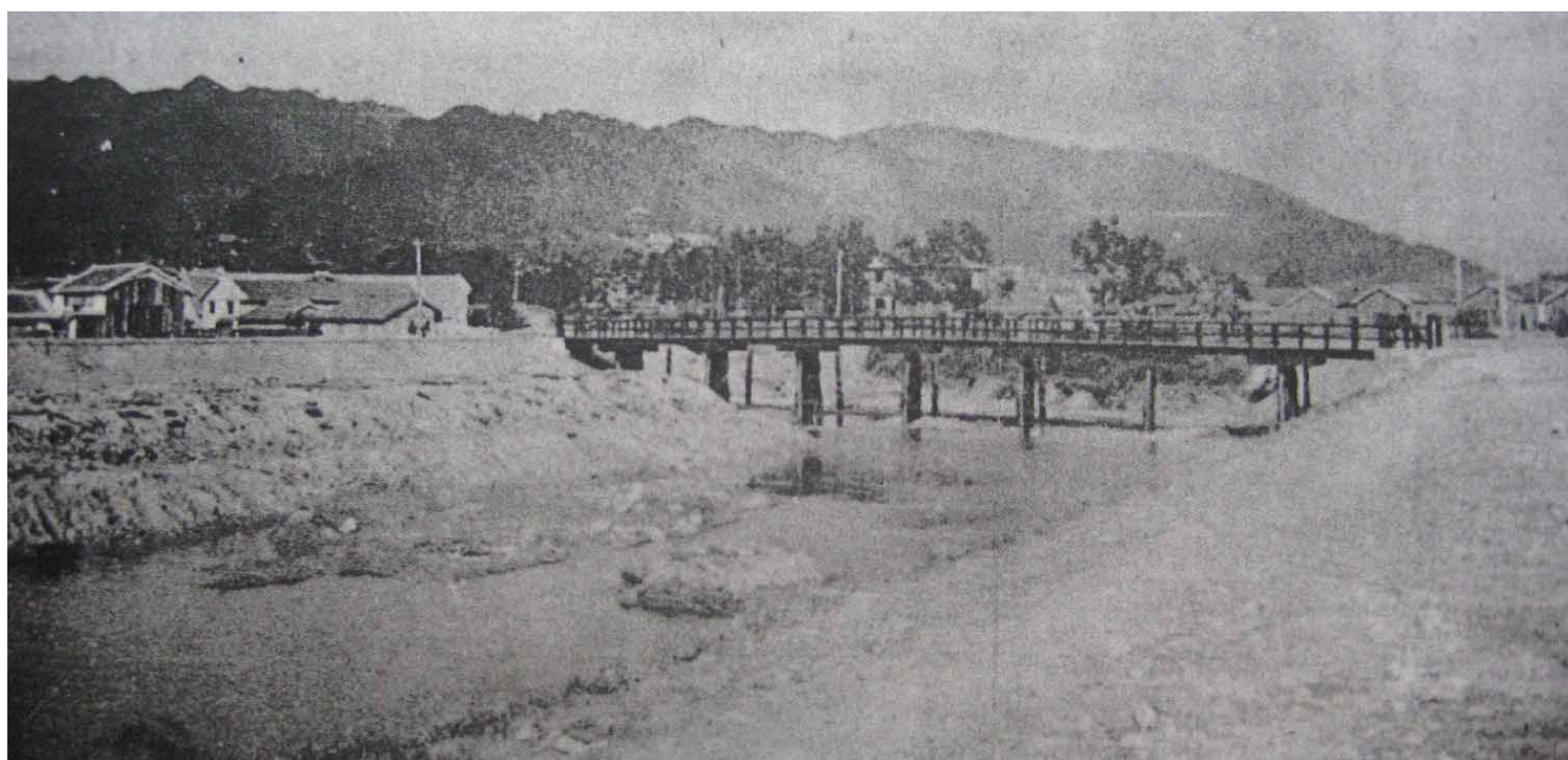
大楠公像



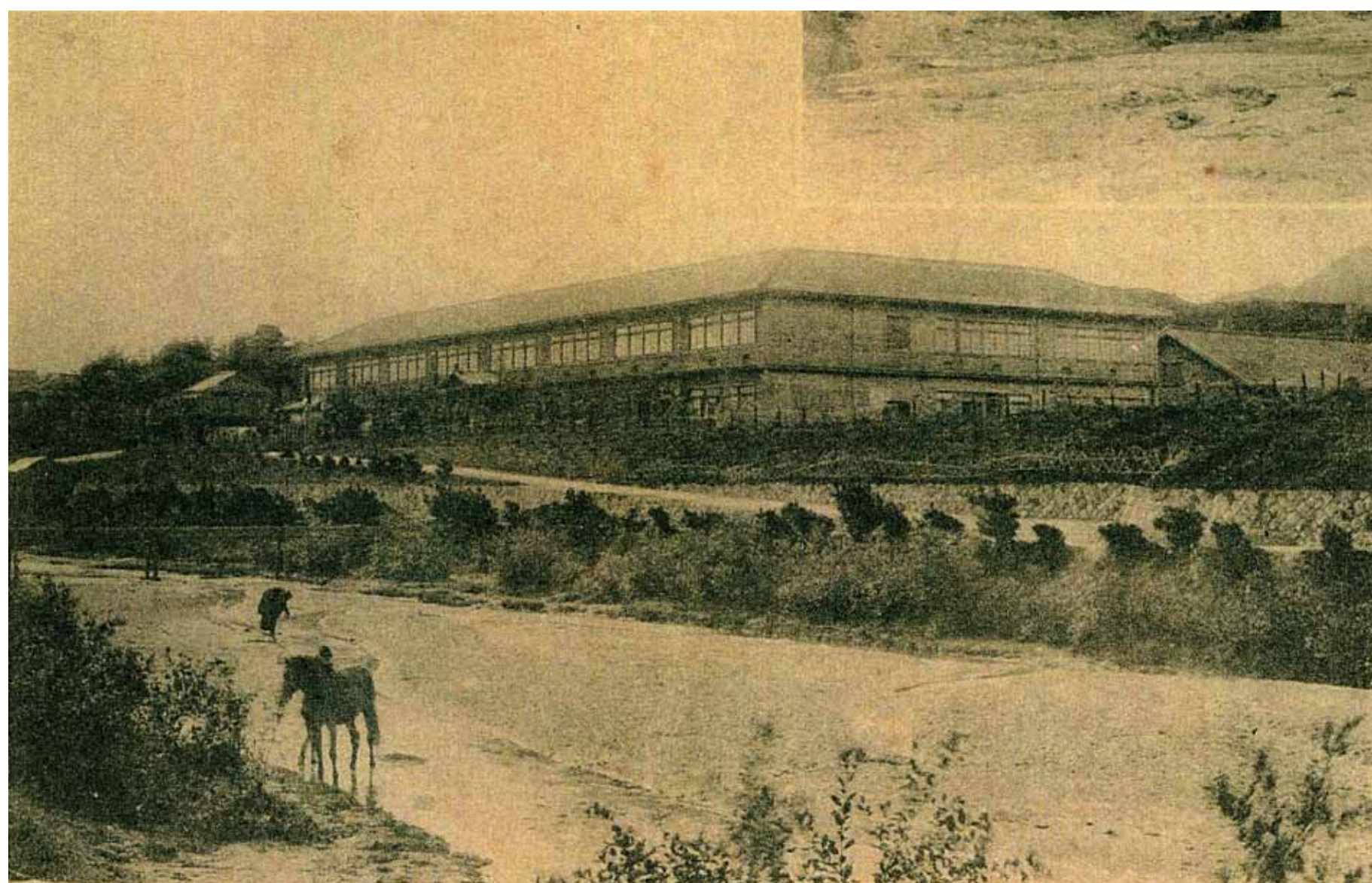
神戸タワー



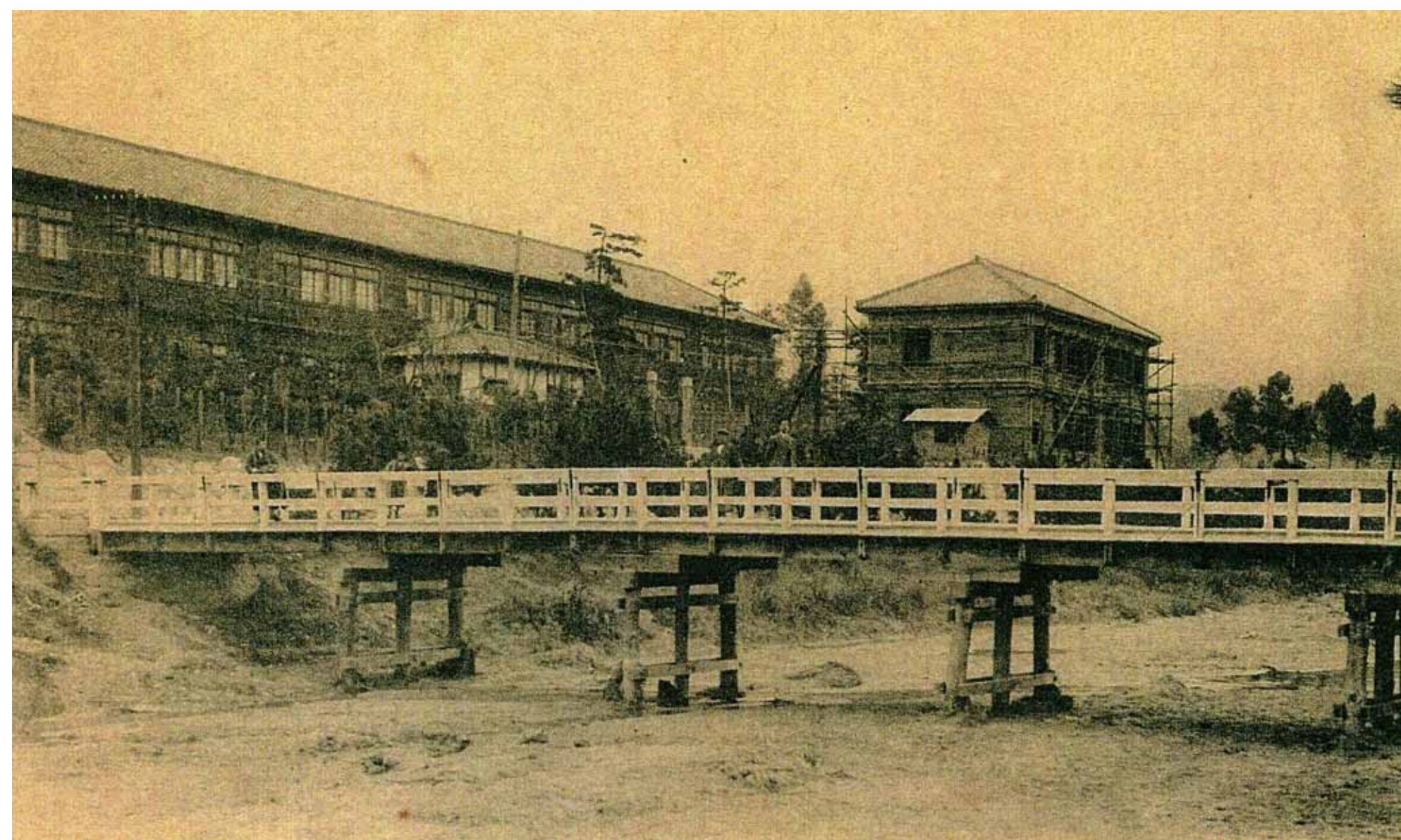
写真で見る新湊川



付替え後の洗心橋付近の様子（『ふるさとの思い出写真集 明治 大正 昭和 神戸』）



明治41頃の神戸二中と新湊川（兵庫高等学校提供）



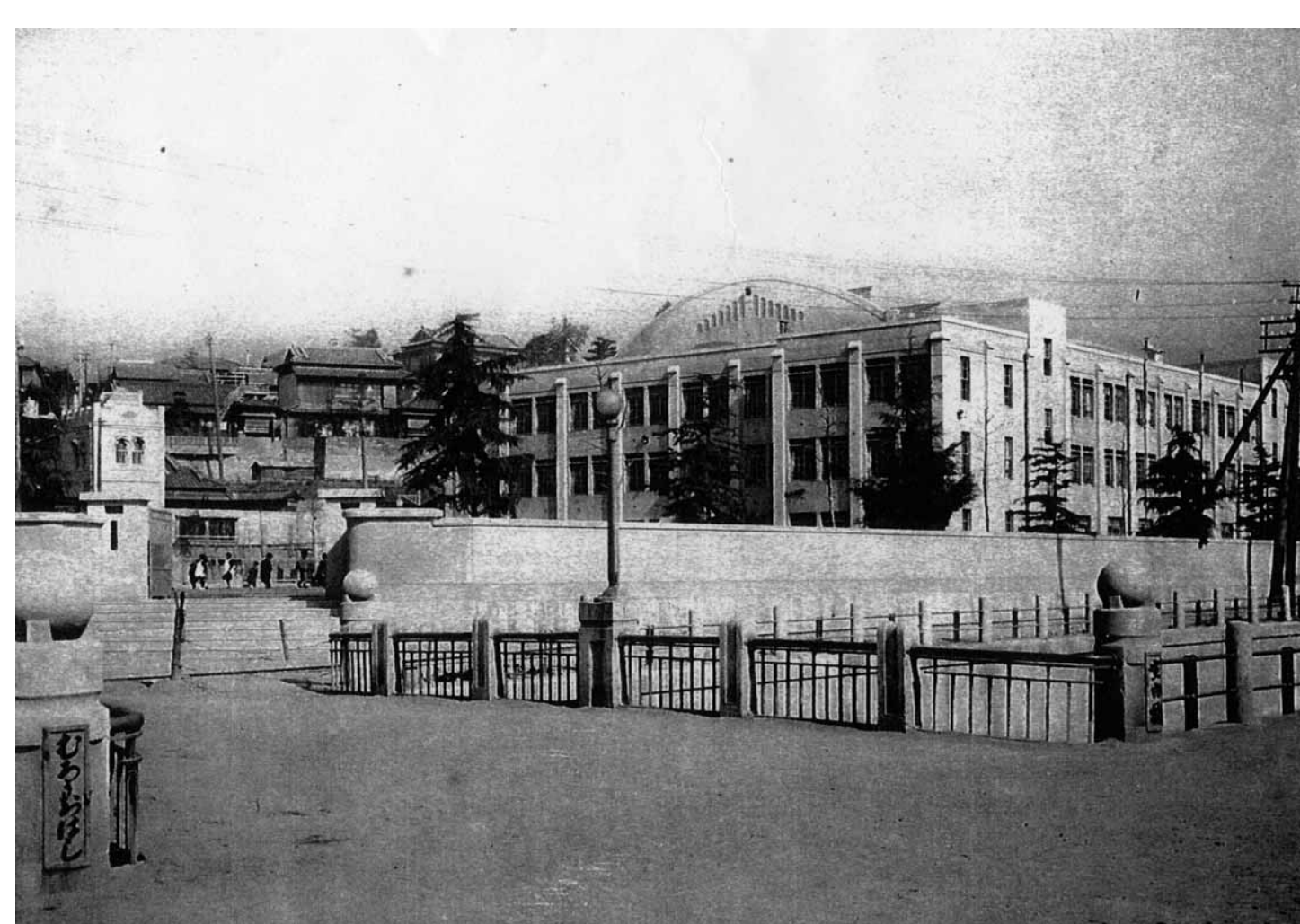
大正8年頃の神戸二中と三六橋（兵庫高等学校提供）



大正15年頃の室内小学校と室内橋（室内小学校提供）



改修工事終了後（昭和4年頃）の房王寺橋付近の様子（神戸長田コンベンション協議会提供）



昭和2年頃の室内橋（室内小学校提供）

写真で見る新湊川

戦後、高度経済成長する社会にあって、新湊川の姿も時代を反映してきましたが、震災復興による河川改修でその景観は大きく変わりました。



昭和60年頃の氷室橋から上流



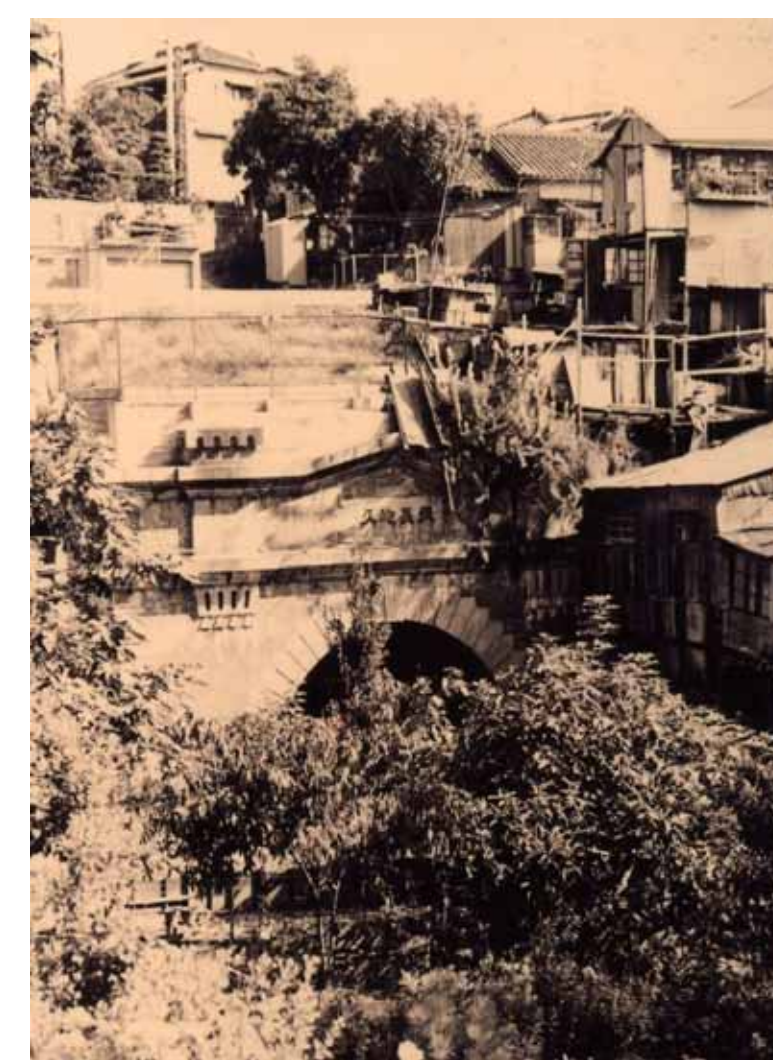
昭和56年頃の氷室橋から下流
(『マルシン(丸神商業組合)の歩み』)



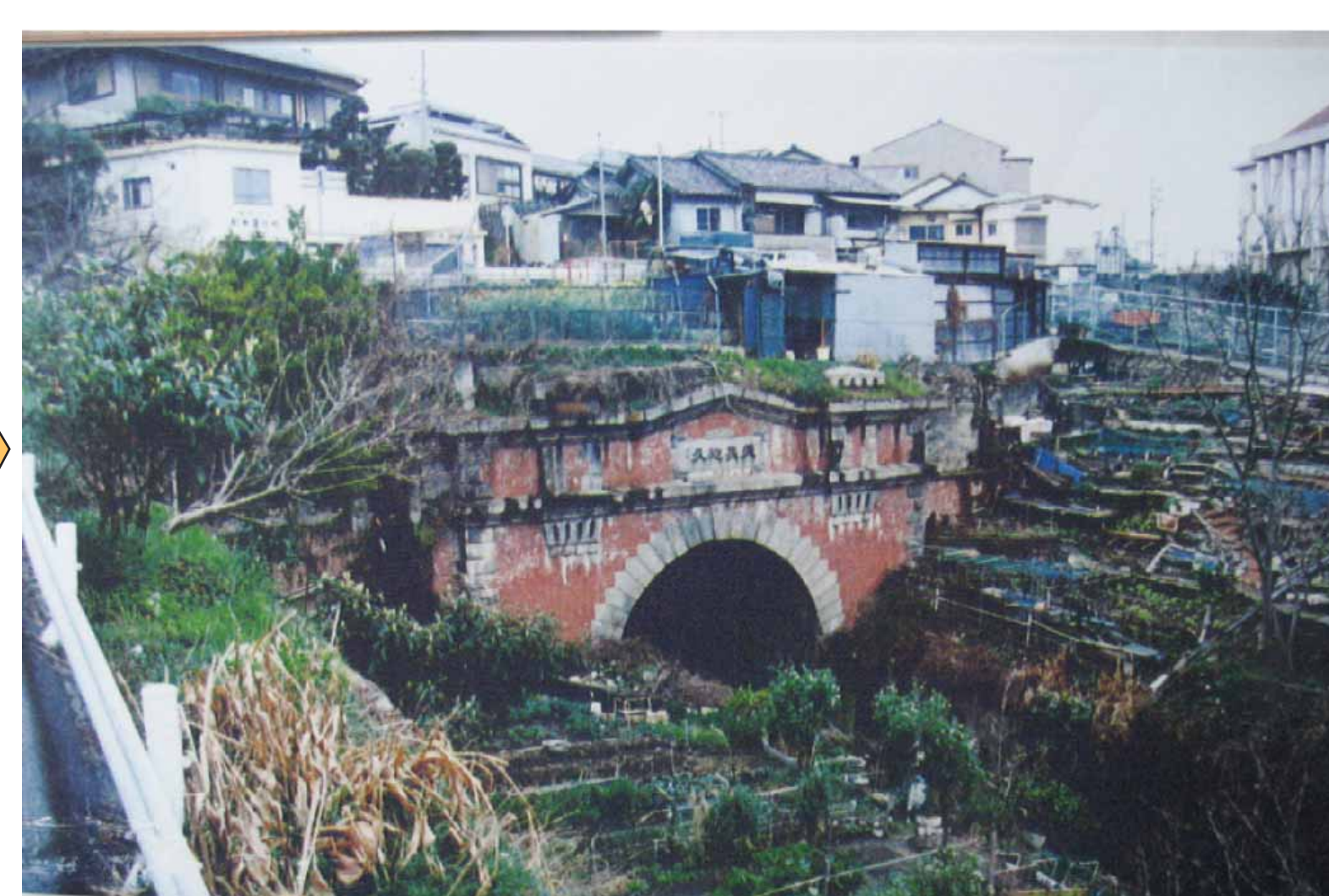
昭和60年頃の氷室橋から下流



昭和30年代頃の下流側坑門
(『夜明けの人びと』朝日新聞神戸支局編)



昭和49年頃の下流側坑門
(神戸長田コンベンション協議会提供)



昭和60年頃の下流側坑門



昭和30年代頃の室内橋から上流
(『長田の歴史』)



昭和60年頃の室内橋から上流



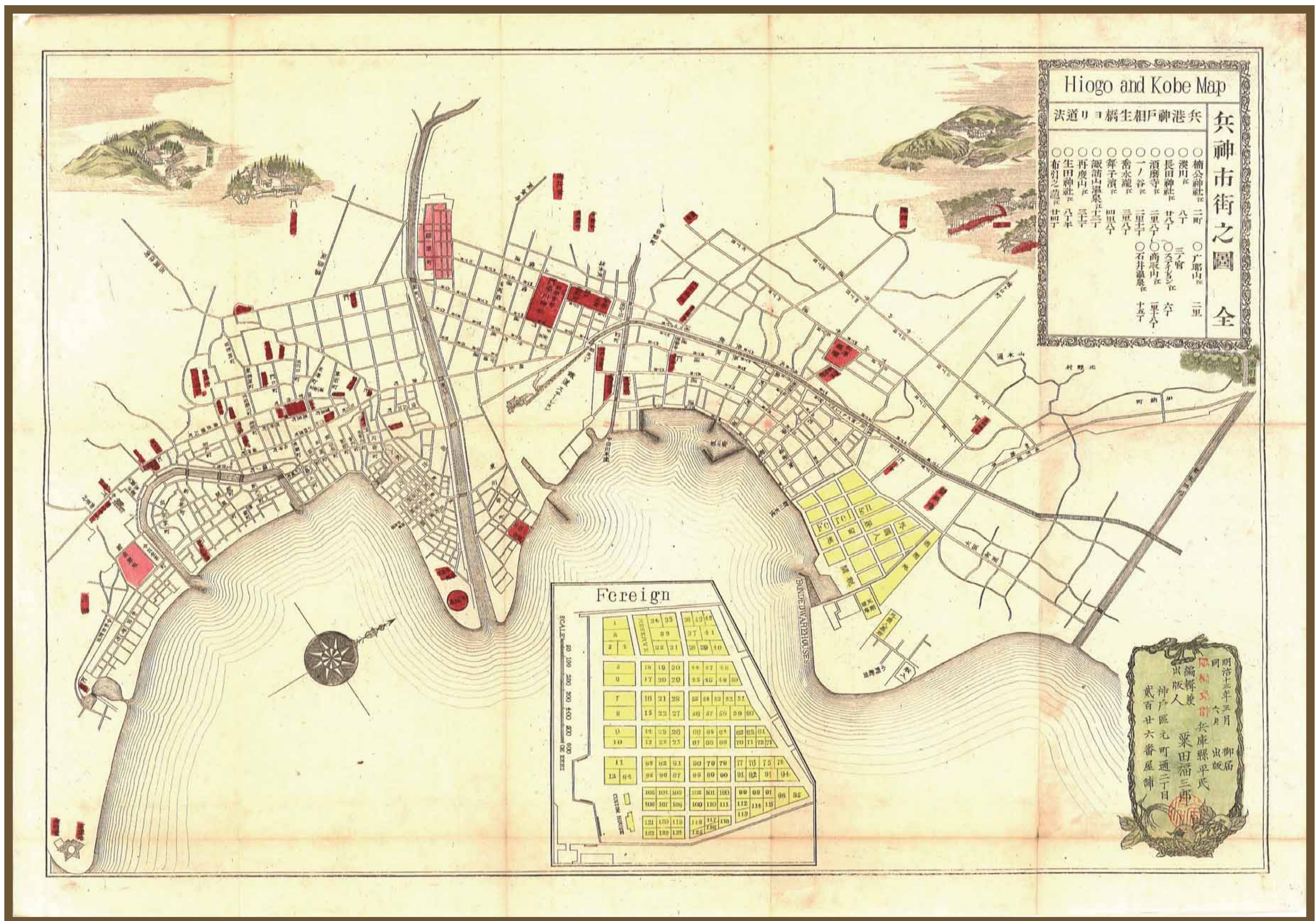
昭和30年代頃の長田橋から上流
(『市民のグラフ こうべ』No314)



昭和60年頃の長田橋から上流



地図で見る湊川、新湊川



明治13年に発行された市街地図

(提供：ハケ代信行氏)



大正9年に発行された市街地図

(提供：ハケ代信行氏)

地図で見る湊川、新湊川

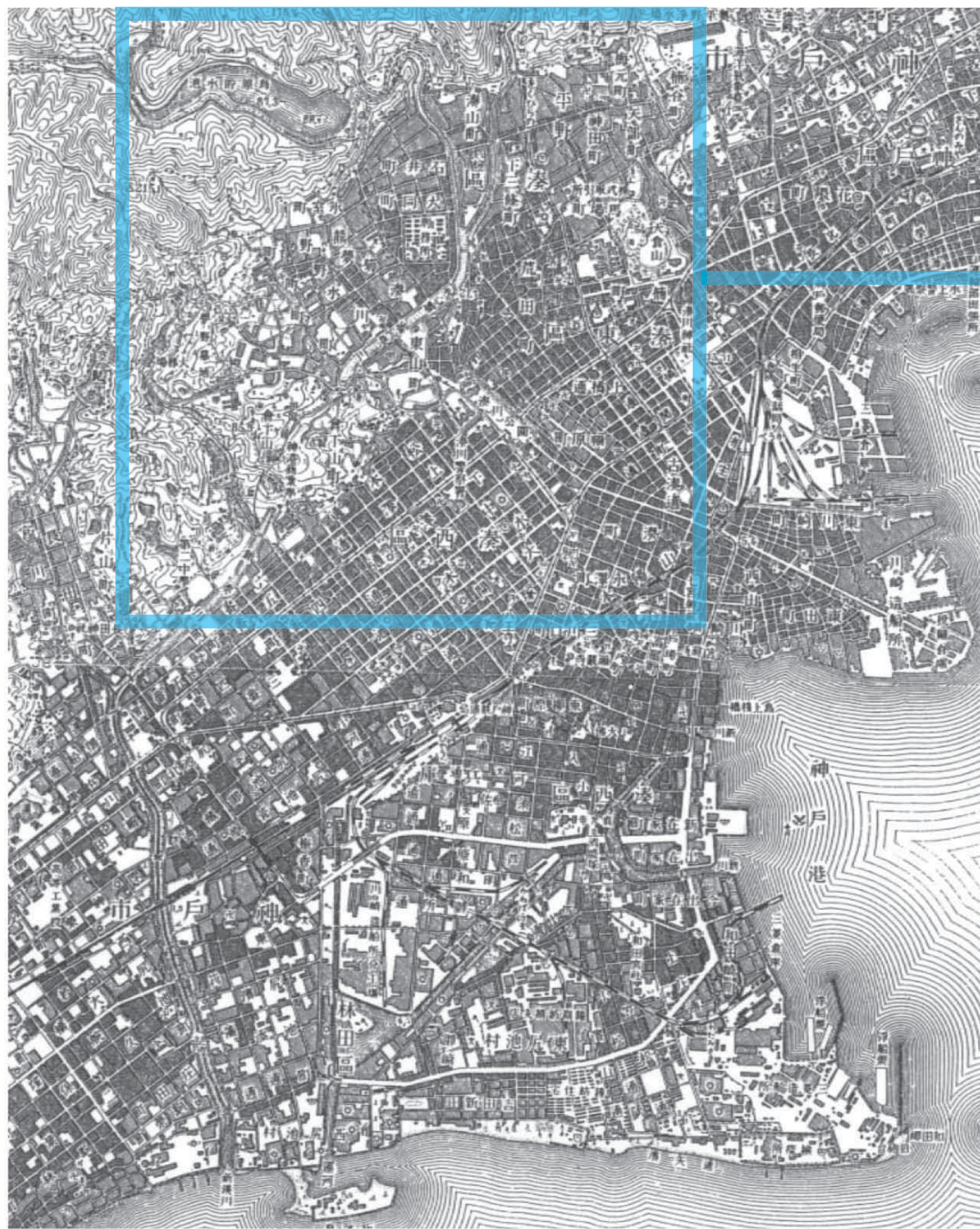


明治18年（『明治前期関西地誌図集成』柏書房1989 明治18年測量仮製二万分一地形図）

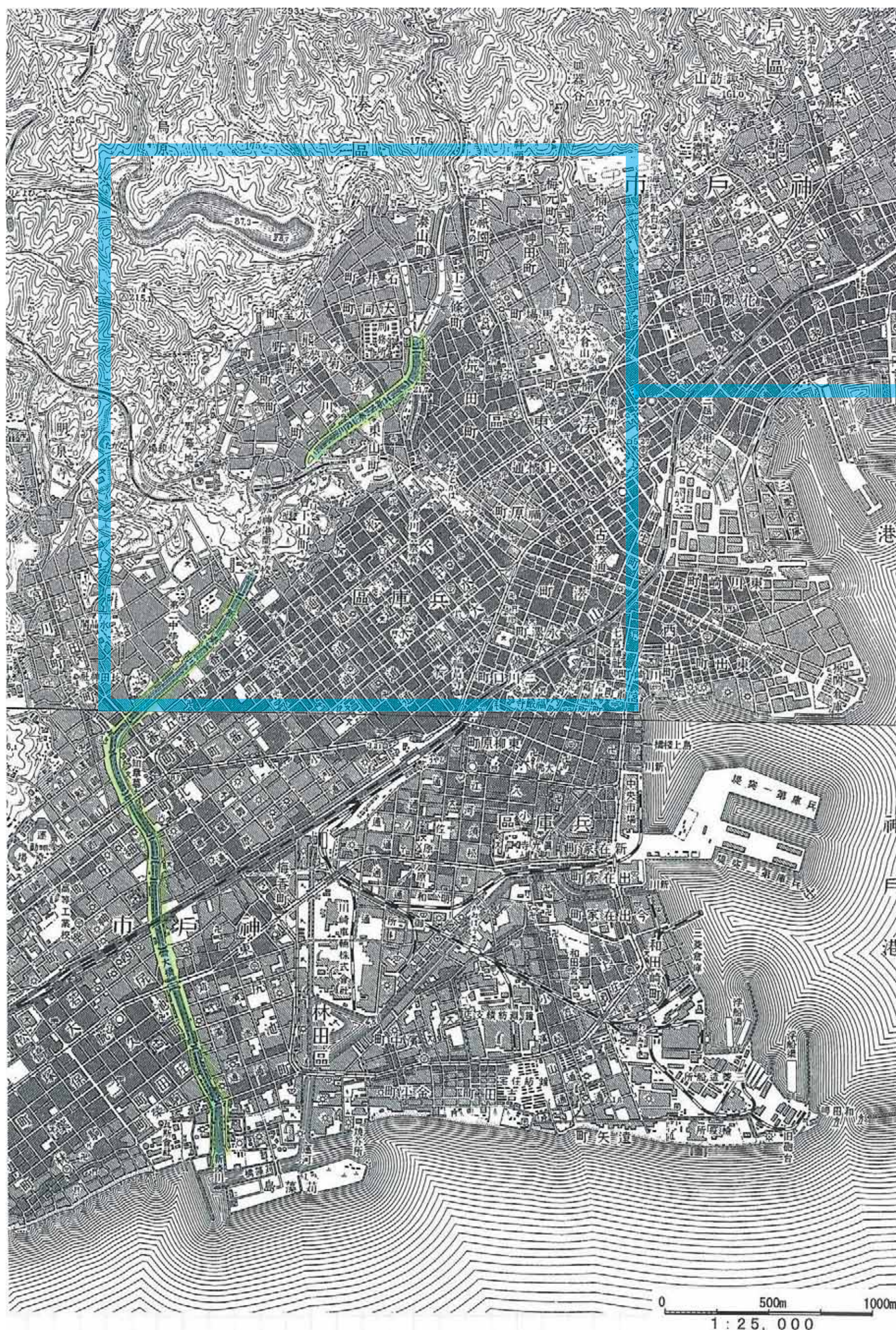


明治43年（出典：陸地測量部地形図）

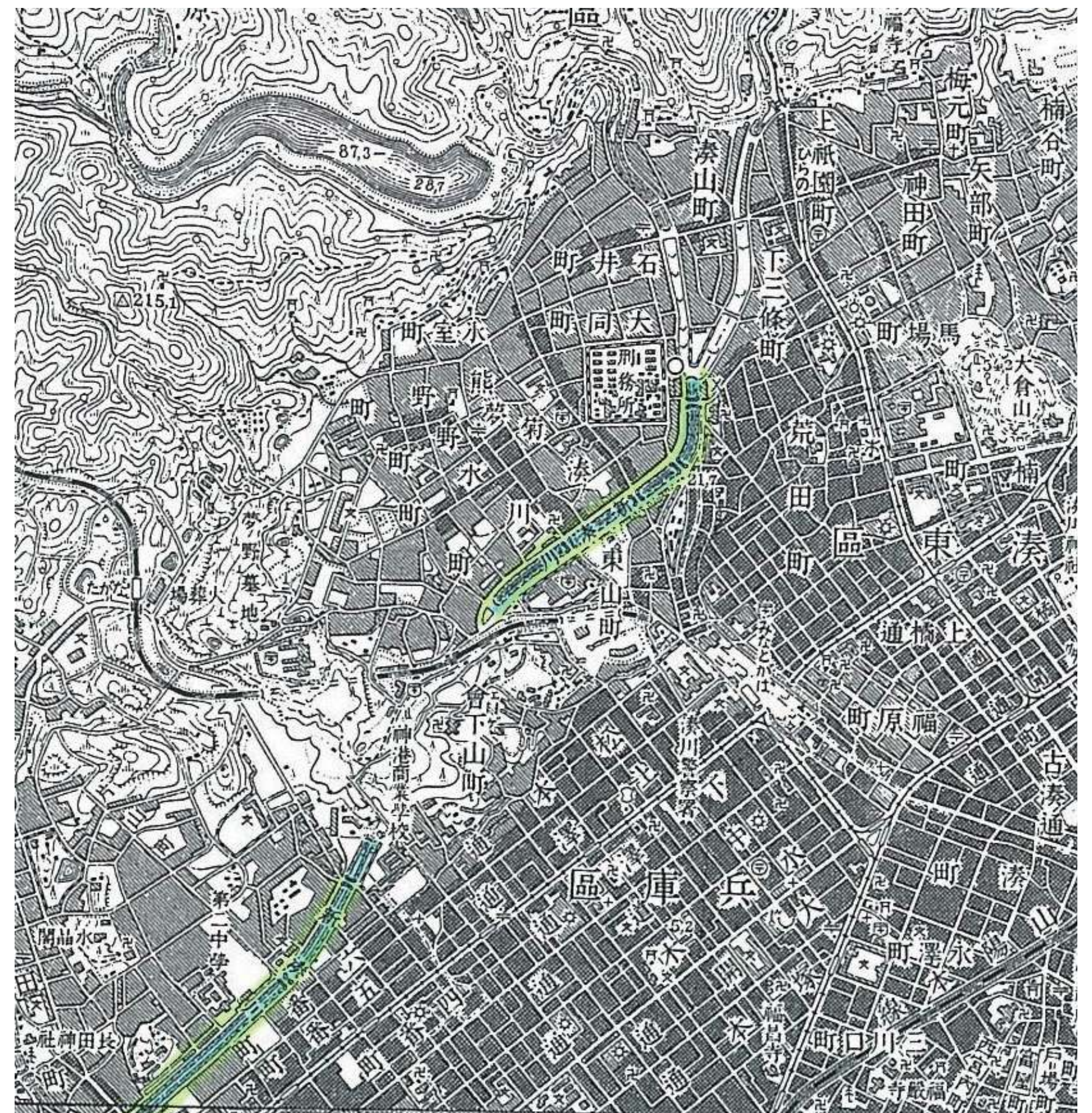
地図で見る湊川、新湊川



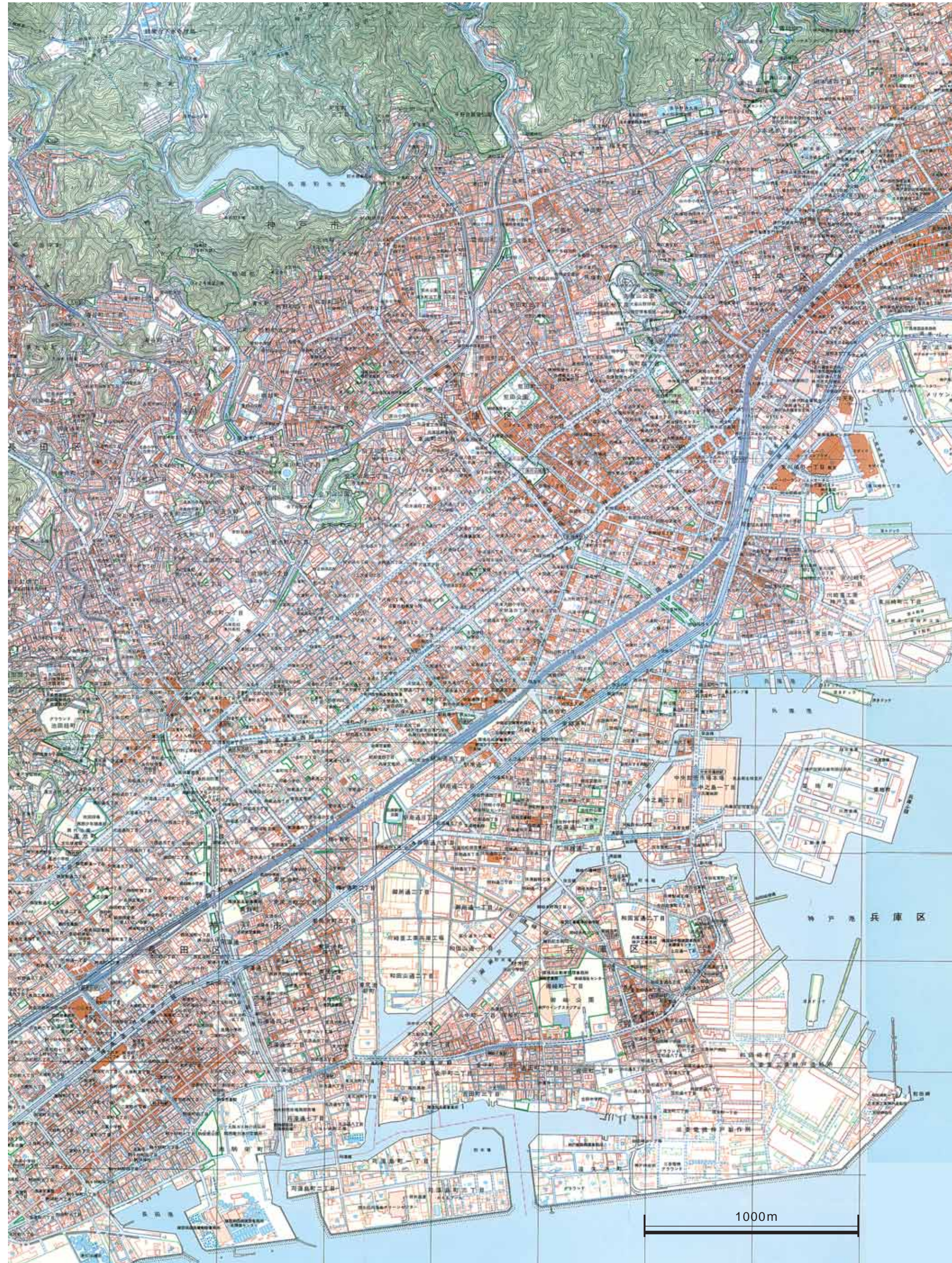
大正12年（出典：陸地測量部地形図）



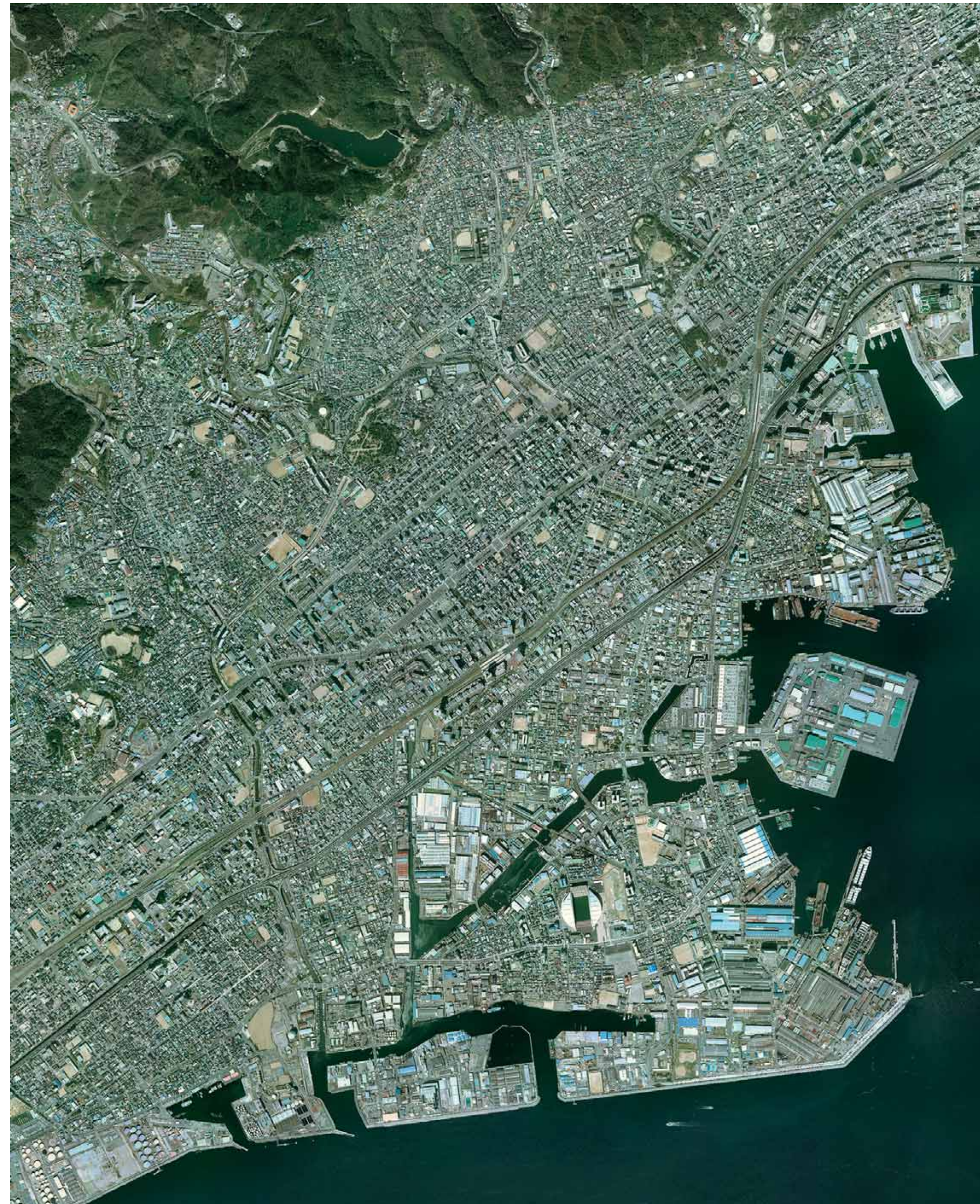
昭和11年（出典：国土地理院地形図）



現在の新湊川



平成13年（出典：国土地理院地形図）



（撮影：平成14年3月）